

燈光



11

「灯台絵画コンテスト 2020」入賞作品

● 国土交通大臣賞

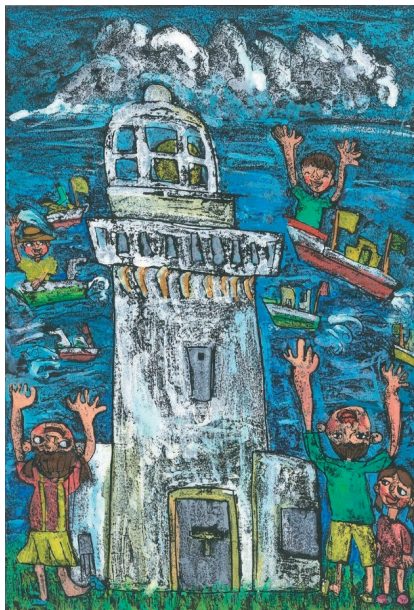
(表紙)「入道崎」

武田 さくら さん

秋田県男鹿市男鹿北中学校 3年

評：風を感じる絵です、これから点灯しようとする灯台の頼もしさを感じます。

● 海上保安庁長官賞



「だいすき たねがしまとうだい」

山口 優那 さん

鹿児島県中種子町立油久小学校 2年

評：黒地をベースに作るという自分の描き方を持っている。灯台の風雪に耐えた経年劣化が表現されている。

● 燈光会会長賞

評.. 灯台を中心にした花火大会の賑やかさと光の競演、みんな元気になってほしいとの作者の気持ち が伝わってきます。



「みんな元気になあれ！下関チアアッパ花火と二つの灯台」

原口 怜久 さん

長崎県大村市立竹松小学校 5年

● 金 賞 中学生の部



「初夏の室戸岬灯台」

加納 秋桜 さん

愛媛県宇和島市立三間中学校 3年

●金 賞 小学生 高学年の部



「夕日の出雲日御碕灯台」

三原 菜結 さん

和歌山県日高川町立三百瀬小学校 6年

●金 賞 小学生 低学年の部



「みんなを まもる とうだい」

小島 叶 さん

長崎県対馬市立金田小学校 2年

金石燈台及び旧白尾燈台をペーパークラフトで再現

金沢海上保安部次長 藤島 充良

1 はじめに

今年、金沢港は昭和45年11月の金沢港開港から50周年を迎えます。「金沢港クルーズターミナル」が、本年6月1日に新築オープンし、大型船による金沢入港操船シミュレーター体験(100円)や地元音楽家によるミニコンサートが催されるなど子供から大人まで楽しめるアミューズメントパーク的な存在となり賑わいを見せています。

この金沢港の記念すべき年に何か海に関する事で役立てたいと考えていたところ、既に廃止された金石燈台(金沢港金石地区)及び旧白尾燈台(かほく市白尾)の写真を入手することができましたので、金沢港開港50周年に合わせ、縮尺1/50のペーパークラフトで再現することとしました。

2 旧白尾燈台

白尾燈台については、昨年の本誌7月号に掲載させていただいたように、平成30年9月14日に廃止され、



2代目白尾燈台



昭和35年頃の旧白尾燈台(七塚町記念誌)

地元かほく市に買い取られ、観光資源として活躍しています。

今年の3月に交通次長室の書棚を整理していたところ、平成16年2月11日に「海と砂丘のふるさと」という七塚町（現かほく市）が発行した記念誌において、旧白尾燈台の写真が掲載されているのを発見しました。

七塚町は、高松町及び宇ノ気町と合併し、平成16年3月1日にかほく市となり、これに合わせ七塚の歴史や文化を子孫に伝えるため「図解七塚町記念誌・海と砂丘のふるさと」が発行され、旧七塚町の各家庭に配布されたものです。

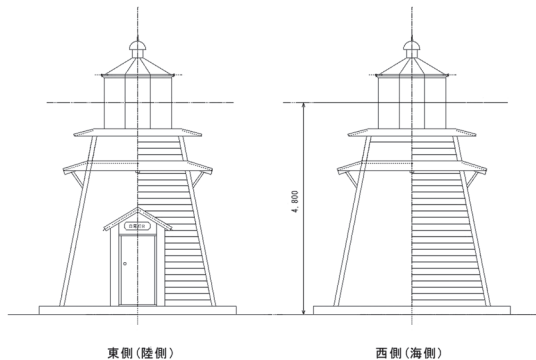


設立当時の白尾燈台（七塚町記念誌）

平成16年に金沢海上保安部灯台課職員が、この七塚町記念誌を入手し、後世に残してくれたおかげで、旧白尾燈台の姿を知ることができました。

今回、ペーパークラフトで再現した旧白尾燈台は、大正3年3月4日に当時の河北郡によって建設された初代白尾燈台を再現したものです。

航路標識経歴簿によれば、「昭和24年3月に国営移管を前提とする移転改築が行われ、構造は従来通りで、位置は旧場所の後方30メートルの高台に建設された」と記録があります。大正3年の初代灯台から移転改築した昭和24年までは、35年間、木造灯台として使用されたので、この移転改築においては、木造部分は新替えされ、灯ろう部分などは再利用



CADで復元された旧白尾燈台図面

されたものと考えられます。この移転では、基礎から灯火の高さが5・2メートルと移転前とは40センチメートル高くなっています。

初代白尾燈台の告示事項である灯台基礎から灯火の高さ4・8メートルが判明していたことから、写真を縮尺定規が利用できる大きさにコピーし、各寸法を測定し、C A D図面にて復元しました。

金沢海上保安部次長室の書棚は、かつて3か所勤務した部署次長室に比べ、格段に灯台関係の資料が豊富に残されており、歴史書物や古文書を後進に伝えていただいた諸先輩方に敬意を表したいと思います。

3 金石燈台

石川県大野町史によれば、明治11年11月に新川（犀川と思われる）

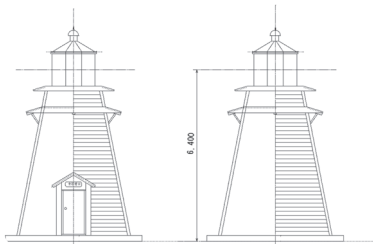
縁に陸上から屋上までの高さ二丈（約6メートル）の木造黒塗灯台が建設され、明治30年4月に下金石日和



燈台モニュメント（銭五の館）



金石町灯台（銭屋五兵衛記念館所蔵）



C A Dで復元された金石燈台図面

山燈竿と称し改築され、明治30年8月15日に点灯しました。北緯36度37分、東経136度36分（日本測地系）に設置されましたが、同燈竿は明治45年3月31日に廃止されたと記録されています。

したがって、金石燈台は、明治45年4月頃に石川郡金石町により建設され、点灯したことになります。同灯台は、昭和25年6月12日、海上保安庁に移管され、金石防波堤灯台設置に伴い、昭和32年2月1日に廃止されています。

なお、金石町、大野村及び二塚村は昭和18年に金沢市に編入されています。

金沢市金石本町にある「石川県銭屋五兵衛記念館」

の道路沿いに建てられた灯台モニュメントは、昨年から気になっていたものの一般的な灯明台を模したものと思っていたところ、今年3月に旧白尾燈台の写真を次長室にて見つけ、二重の庇（ひさし）に共通点があることから、今年の7月に「銭五の館」と呼ばれる同記念館に、この灯台モニュメントについて話を伺いに行くこととしました。

参考として、銭屋五兵衛は、幕末の日本海を舞台に劇的に駆け抜けた海の豪商として有名な方です。

同館の松本明洋館長が対応してくれ、旧白尾燈台の写真を持参し、

同記念館の灯台モニュメントと良く似ていることをお話ししたところ、そのモデルは「金石町灯台」とのことと、当時の写真を見せていただくことができました。金石町が建



昭和28年頃の世界図（世界図中央に金石燈台）

設した灯台でもあるので、地元では、「金石町灯台」と呼ばれていたようです。

航路標識経歴簿を確認したところ金石燈台の記録が残されており、CADにて金石燈台の図面を復元するとともに、古い海図から金石燈台があった位置も確認することができました。

両灯台の図面を見ていただければ分かるように、高さが異なるものの、建設された時期がほぼ同じで形状が似ていることから設計者が同じ人ではないかと考えています。

4 両灯台をペーパークラフトにて再現

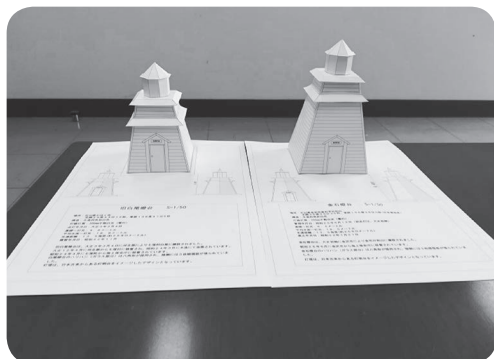
両灯台は、CADで図面を復元し、形状が簡素であることからペーパークラフトにしても製作し易いと考え、両灯台をペーパークラフトにて再現することとしました。小学生以上の方にも作りやすいようにパーツは6点とし30分から1時間程度で簡単に作れるよう配慮しました。

二重の庇に特徴がある灯台で、この庇がアクセントとなり灯台を格好良く見せていると思います。

5 おわりに

今回作成したペーパークラフト及び九本部海洋情報部に作成いただいた3D海底地形図は、「うみっこらんど七塚」（かほく市教育委員会運営）及び「石川県銭屋五兵衛記念館」に8月5日に寄贈させていただきました。両施設とも、海に関する貴重な資料が展示さ

れていることから、地域の方を始め全国から多く方が訪れています。両施設を訪れた方には、灯台の役割や地域の灯台などの歴史を知っていただくほか、夏休み期間などは子供さんも多く訪れることから、夏休みの工作や自由研究の資料にいただければ幸いです。



ペーパークラフトで再現した金石燈台（右）、
旧白尾燈台（左）



銭屋五兵衛記念館への贈呈
同館館長（右）、筆者（左）



うみっこらんど七塚への贈呈
かほく市山口吉男教育部長（左）

— 明治の灯台の話 (62) —

鍋島灯台

灯台研究生

灯台設置場所の相次ぐ変更

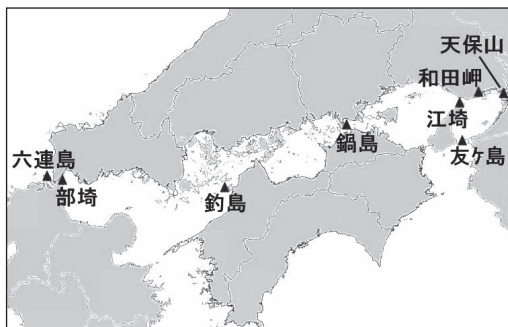
瀬戸内海の岡山県と香川県に挟まれた東西に延びる備讃瀬戸、その中ほどに鍋島灯台はあります。現在は、灯台のすぐ近くに、本州と四国を結ぶ備讃瀬戸大橋が架けられています（写真1）。

瀬戸内海には、明治4（6年）までの2年間に灯台が次々と建てられました。明治4（1871）年4月の江崎灯台を皮切りに、六連島、部埼、苦ヶ島（友ヶ島）、和田岬、天保山、そして鍋島、釣島の8基の灯台です（資料1）。この8基の灯台の器械は、すべて英国から輸入されています。

その器械の購入に関する記録が、早稲田大学図書館所蔵大隈文書の灯台関係記録に



写真－1 鍋島灯台と備讃瀬戸大橋
（本年8月撮影）



資料－1 明治初年の瀬戸内海の灯台位置図

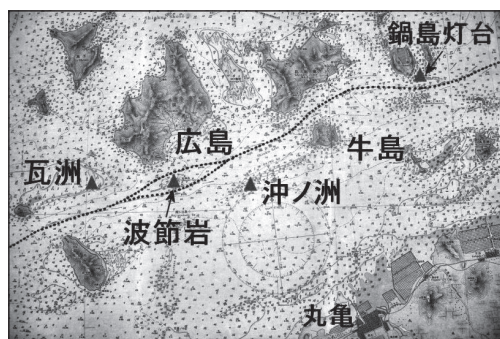
見られます。1869年2月20日（明治2年1月10日）付ハルリーブロントンへの購入手配書には、鍋島灯台は、広島灯台とされています。この広島は、鍋島から約10キロメートル西にある香川県丸亀市の広島です。備讃瀬戸の灯台は、当初、鍋島ではなく、丸亀市沖の広島に設置される予定でした。しかし、その後、広島と鍋島のほぼ中間にある牛島に変更されたことが、明治4年5月27日付の太政類典に次のとおり見られます。

牛島釣島両所燈明臺^{だいてい}御建築^{おぐけんちく}ノ儀 御雇^{おやこ}英人器械方頭
取フラントン氏ヨリ別紙^{べつし}ノ通申立 右ハ最初内海ノ部
ハケ所燈明臺^{だいてい}建築^{けんちく}ノ場所 各國軍艦士官共評論^{ろん}シテ決
定^{てい}致^{いた}シ候處^{ところ} ハケ所ノ内今治^{いまじ}廣島^{ひろしま}ニケ所ノ儀ハ 今般
再実測^{さいじつそく}シテ 航海線路^{かいかいせんろ}ヲ改候^{あらため}ニ付 別紙^{べつし}ノ通評論^{ろん}シテ
牛島釣島両所ニ決定^{ていぎん}致候儀^{ようぎ}ニ付 御採用^{おやこ}ニ相成度候^{あひなりたせうちやうこう}

【解説】

牛島、釣島の両所の灯台建設について、
お雇い英人技術責任者フラントン氏より別
紙のとおり申請され、当初瀬戸内海の八ヶ
所の灯台建設場所は、各国の軍艦士官とも
評論して決定したところ、八ヶ所のうち今
治と広島の二ヶ所は、今般再実測して、牛
島と釣島の両所に決定したので、採用し
ていただきます。

広島周辺の海域は、浅瀬が多く備讃瀬戸
航路の難所でした。同海域には、明治28(1
895)年に波節岩灯標、同35(1902)
年に沖ノ洲、瓦洲の両浮標など、備讃瀬戸
の中で早い時期に次々と航路標識が設置さ
れています(資料2)。



資料－2 広島周辺の航路標識と推薦航路
(明治期の海図より)



写真－2 英国士官レキの墓標と記念碑
(本年8月撮影)

フラントンは、慶応4年8月(1868年6月)に
来日後、時期を待たず英国軍艦マニラ号にて、各地の
灯台設置の測量調査を行っています。広島には、18
68年12月(明治元年11月)に訪れています。この時、
マニラ号の19歳の士官レキ(Frank Toovey Lake)が
亡くなり、広島にて手厚く葬られている記録が、彼の
手記(お雇い外人の見た近代日本 R・Hフラントン

徳力真太郎（訳）に見られます。墓標は、今も広島に残されており（写真2）、2年前には、高松海上保安部長も参列し、没後150周年の記念祭が行われています。この牛島建設予定地から、最終的に鍋島へ決定した事実は、太政類典の明治4年9月29日付工部省から太政官への報告書に次のとおり見られます。

兼テ御許容ニ相成有之候讃州牛島へ燈臺建築ノ儀 尚又今般実地検査ノ所 同所近傍鍋島ト申處 至極適當ノ地ニ付 改テ右へ建築可然條 御傭外國人フラントン並プロウンノ兩人申立候ニ付 其通決定可致此段御届申候也

辛未九月廿九日

工部省

【解説】

兼てご許可になりました香川県の牛島への灯台建設については、なお又今般現地調査したところ、同所近傍の鍋島という所が、最も適任の場所として改めて同地へ建設すべき旨、お雇い外人のブラントンとブラウンの兩人の申し立てにより、その通り決定することをご報告いたします。

明治4年9月29日

工部省

大隈文書の灯台関係記録（燈台寮建築事務摘要明治5年10月）には、鍋島灯台の工事開始は明治四年辛未十一月十日とあります。鍋島への灯台設置は、ブラントンと灯台視察船テーボール号船長ブラウンの要請により、工事開始のほぼ1ヶ月前の直前に決められています。

その頃、英字新聞JAPAN WEEKLY MAILの記者が、テーボール号に同乗し、各地の灯台設置状況を同紙に記しています。テーボール号は、鍋島にも訪れており、1872年2月3日（明治4年12月25日）付の同紙には、次のとおり見られます。

鍋島

この島は、石造りの灯台の建設が見込まれている。

灯器は第三等の光学レンズを装置したものを予定しており、瀬戸内海を航海する船に對し、最も有益な援助（アシスト）を与えることは疑いない。この灯台の光は、男木島から六島に通ずるセント・ヴィンセント水道を示すためのもので、無頓着に海図を見ただけでも、このような灯火が非常に重要なことは明らかである。しかし、灯台建設の準備作業は、何もしていなかった。我々は島に上陸し、日本人の責任者へ、いくつかの工

事作業を開始するよう命令し帰船した。

この記事の前の瀬戸内海を紹介する記事の中で、鍋島に到着したのは、(1871年) 12月15日と記されています。同日を和暦に直すと、明治4年11月4日となり、起工日の6日前となります。この時の視察にて指示を受け、鍋島灯台の工事を開始したことが容易に考えられます。記事に見られる、工事の準備が何もできていなかったのは、相次ぐ設置場所の変更が原因ではないのかと推測されます。

鍋島灯台の石の産地

鍋島灯台の工事の詳細が分かる記録は、これまで確認できていません。道家正之と菊地元信という燈台寮の役人が、工事に携わったとの記録のみ、国立公文書館と大隈文書の記録に見られます。

道家正之の記録には、明治4(1871)年11月燈台寮任用後すぐに、同年11月11日から翌年の10月9日まで鍋島灯台建築のための鍋島への出張の記録が見られ、鍋島灯台の起工時から灯台建設の全工程に携わっていたことが分かります。同氏は、天保10(1839)年6月生、旧名紋之助、静岡県平民、鍋島灯台の建設

時は30代の働き盛りの技術官員でした。その後、犬吠埼、尻屋埼灯台の建設工事に長期間従事し、経験も知識も積み六等技手に昇任し、明治12(1879)年に瀬戸内海三原瀬戸の長太夫立標の建設工事に従事中、悪性の流行病に罹り同年8月に細島にて亡くなっています。

菊地元信の記録には、鍋島・釣島灯台兼務と見られます。出張時期は不明ですが、両灯台は明治4年に起工し、明治5年から6年にかけて完成していることから、明治5年前後と考えられます。菊地氏は、両灯台のほか部埼灯台と金華山灯台の工事に携わっていた記録が諸標成功録(国会図書館蔵)と明治8年の工部省考課状(国立公文書館蔵)に見られます。灯台の工事は、多くの官員とお雇い外国人が、短期間に交代で携わっていくのが多い中で、道家正之が鍋島灯台に起工時から完成近くまで長期間従事しているのは異例です。

灯台の工事の断片が、鍋島灯台点灯120周年の記念行事の燈光の記事(平成5年2月号)の中で、地元の話として、わずかに記録されています。鍋島灯台建設時に、灯台の材料の切石を現場まで引き上げるのに、岩礁の上に石を積み上げ船着場を造り、ここから現場までロープをとってリフトを作ったと、言い

伝えられていたことが記されています。部埼灯台（明治4年）の建設時の写真には、これと同じものと思われるレールが敷かれた資材運搬用のリフトが写されています（写真3）。

この肝心の灯台の石材については、産地が判然としません。一番に考えられるのは、良質の花崗岩が豊富に取れた隣接の与島です。今夏、与島を訪ね、高松海上保安部交通課も同行し、与島に残る鍋島灯台の歴史調査を行いました。郷土誌「坂出市の島しょ部の歴史と民俗」を今年3月に作成した坂出市役所与島出張所



写真－3 部埼灯台建設時のリフトとレール
（燈光会保管写真より）

の濱本敏広所長に、鍋島灯台の石材が与島産であるか伺ったところ、意外なことが分かりました。

与島の石の切出しは、豊臣秀吉の大坂城築城が始まりでした。その後、江戸期から明治期までは行われず、当時島では塩田が盛んに作られ、石切りが復活したのは明治以降とのことです。そして、島の形状が変わる程切出した多くの石が、どこに運ばれたのかという記録は、島には全く残されていないとのことでした。島の人達にとって、自分の島の石を切り出すことは、自分の身を削るのと同じと捉え、石切りに関わる人達は、島外の者ばかりだったとのことでした。鍋島灯台の地元である与島でも、灯台の石が与島の石なのか分からず、数年前に濱本所長から海上保安庁へ、灯台の石の産地について質問されていたのです。

今回、高松海上保安部をはじめ、東京の国立公文書館、国会図書館、燈光会ほか、各地に残る記録文書を調べましたが、鍋島灯台の石の産地が分かるものはありませんでした。その中で、与島の石に関する興味深い燈光の記事がありました。大正6（1917）年5月号に掲載の鍋島灯台職員による「鍋島より啓上」の記事に、与島を紹介する中で次の一文が見られます。

與島は所謂鹽飽七島の一つにて其周回は約一里餘、島中の北半山地には到る處花崗石を産出致候往年室戸埼 安渡移矢岬 其他の建築材料に使用せられたる石材は即ち当地の産なりし様聞き及び候

四国高知県の室戸岬灯台と国後島の安渡移矢岬灯台ほかに、与島の石が使われているとの話です。両灯台とも明治32（1899）年に点灯開始した鉄造の灯台で、与島から遠く離れていますが、両灯台とも当時から名の知れた灯台です。文は真面目に書かれており、記事が書かれた大正6年から明治32年は18年前で、当時はそれ程古い話でもなく、著名な灯台のエピソードとして取り上げられています。残念ながら、この記事にも、与島の石が鍋島灯台に使われているとは記されていませんでした。

現在、鍋島と与島は防波堤で繋がっており、その先の灯台へ向かう入口の脇には、石を切り出した跡が見られ、灯台の石は鍋島産ではないかとの話もあります。今回、高松海上保安部交通課長と実地検分しましたが、灯台と官舎ほか建物を建てられる程の大量の石が切出されたようには見られませんでした（写真4）。なお、鍋島の石に関しては、次のような興味深い燈光記事も

見られます。大正10（1921）年4月号に掲載の横浜貿易新聞記者の灯台視察船同乗記「潮に乗って横浜から門司まで」の中で、鍋島が次のように紹介されています。

鍋島は香川縣鹽飽諸島の中の一小島であるが最近其島の周囲の砂から硝石の出る事を発見されて某硝子製造會社が買収にかかったのでサア大変、純朴な村人も欲の為には血眼になって我も我もと売飛ばし 尚燈臺の敷地迄削らうと夜な夜な境界石を動かすので燈臺では大騒ぎ、目下看守長が縣へ交渉中とある、テも恐ろしいは欲の皮力ナ



写真－4 鍋島灯台入口脇の石の切出跡
（本年8月撮影）

当時の新聞の三面記事のような終わり方には多少興ざめしますが、鍋島の岩場の切出し跡を見ていると、この記事はまんざら作り話でもないような気がします。果たして鍋島灯台の石の産地は、一体どこなのでしょうか。令和の猛暑の夏空の下、鍋島灯台に向かうと、灯台は島の頂でどっしりと構え、我々には何も教えてくれず、涼しげな表情で沈黙を続けていました。

鍋島灯台のレンズの変遷

太政類典にある鍋島灯台の明治5年の点灯開始の布告文は次のとおりです。

鍋島燈臺

日本政府布告ス 瀬戸内讃岐國ノ小島鍋島ニ於テ第三等燈明ヲ設 明治五年十一月十五日西曆千八百七十二年十二月十五日ノ夜ヲ始トシテ 爾後毎夜日没ヨリ日出マデ点燈ス

燈臺ノ位置並ニ燈明ノ光景ハ左ニ詳記スル者ナリ

明治五年十月二日 千八百七十二年十一月二日

横濱辨天工部省分局燈臺寮工部省三等出仕兼

燈台頭 佐野常民

鍋島燈臺ハ 瀬戸内與島ノ南端ニ接近セル小島鍋島ノ頂巔ニ建地ス 此地ハ北緯三十四度二十三分十五秒ニシテ英国「グリーンニッチ」ヨリ東経百三十三度四十八分四十五秒ニ當ル

ナリ

燈明ハ第三等不動白色曲射ニシテ海面二百六十度即チ北十一度東ヨリ南西ヲ廻リ 北八十九度西マデノ方位ヲ照輝シ 其他ハ蔽陰ス 但シ東方位ナリ

燈火ハ高サ海面ヨリ八丈五尺ニシテ 其光線凡十五海里ニ達ス

築造方補員 ステルリング、フィスシエル

鍋島灯台の点灯開始時、ブランドンは一時帰国していたため、代理を務めていたフィッシャー (STIRLING FISHER Assistant Engineer) が記名しています。鍋島灯台は明治5年当時、三等不動フレネルレンズが設置されていました。光は点滅 (レンズが回転) しない不動の白色光です。光達距離は15海里で、現在の備讃航路をほぼ全域カバーしていました。この明かりが、その2年後に、部埼灯台と共に変更されています。

明治七年十一月十三日

部崎鍋島両燈明改正

工部省布達

豊前國部崎燈臺、讃岐國鍋島燈臺燈明之儀、別紙第八号の通り、改正致候條、此旨更に布達候事

十一月十三日 第八号 部崎並鍋島燈臺

部崎の燈明は、第四等不動の處、明治七年十一月七日即ち西曆千八百七十四年十一月七日より、第三等不動に変換す 其光達十六海里なり

鍋島の燈明は、第三等不動の處、同日より第四等不動に変換す 其光達凡十二海里なり

尤 発光の方位は、右両所とも従前と同様なり

燈臺頭 佐藤與三

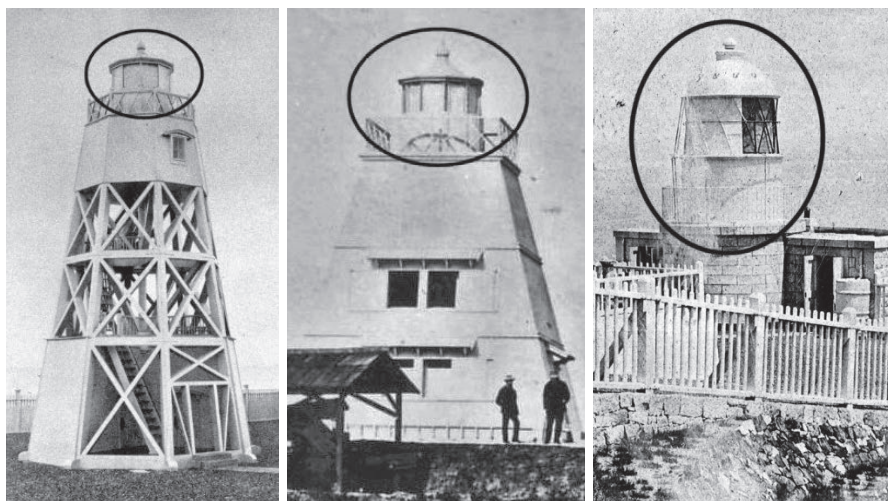
築造方 アール ヘンリー ブラントン

両灯台が三等から四等に変更されていることから、レンズの相互の交換が容易に考えられます。明治7年以降、三等不動レンズの新設灯台は、明治26年の汐首岬灯台までないことから、鍋島灯台の三等不動レンズは、部崎灯台への移設使用がほぼ断言できます。興味深いことに、点灯開始時の部崎灯台（写真5）

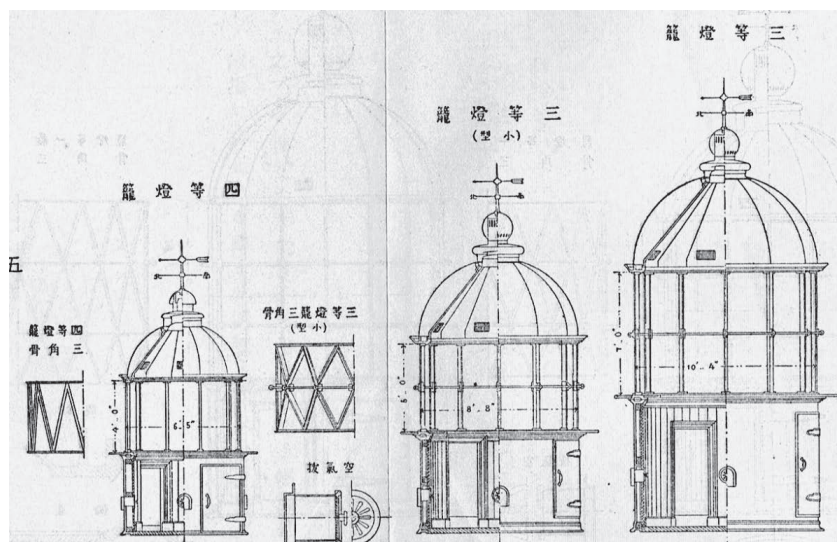
を見ると、すでに三等小型の燈籠が設置されています。部崎灯台と同じ、明治5年に四等不動レンズが設置された和田岬と天保山の両灯台（写真6・7）は、規格通りの四等燈籠が設置されています。部崎灯台は最初から、三等レンズがいつ設置されてもいように造られた灯台だったのです。

現在、鍋島灯台に設置の四等不動レンズは、高松海上保安部に保管の工事記録によれば、昭和56（1981）年3月に交換設置されたものです。この時撤去された明治7年に部崎灯台から移設された四等不動レンズは、令和2年現在、行方不明です。昭和56年撤去後、高松航路標識事務所の倉庫にて保管されていたことは、当時在勤していたOBの方から確認が取れましたが、以降、同レンズがいつ倉庫から何処に移されたかは、今回は確認できませんでした。

けれども、部崎灯台に移された鍋島灯台の初代の三等レンズは、所在が確認できています。明治30年2月に、部崎灯台から更に淡路島の江崎灯台に移設され、今も同灯台で使用されています。鍋島灯台の初代レンズは、瀬戸内海を西へ東へ移動し、瀬戸内海全域を照らし続けていたのです。部崎灯台から江崎灯台への移設の事実は、燈光大正7（1918）年9月号の記事



写真－５～７ 明治５年に四等不動レンズが設置された灯台の灯籠
 右：部埼、中央：天保山、左：和田岬（燈光会所蔵写真）



資料－３ 三等燈籠と四等燈籠の違い
 （冊子「燈臺」に添付の灯籠区分図より抜粋）



「明石瀬戸の燈臺^{とうだい}」に明記されています。記事は、航路標識管理所長を務めた明治期の灯台界の重鎮「石橋絢彦」が記しています。

最後に、現在の鍋島灯台のレンズについて、特筆すべき機構を紹介します。不動レンズなのに、水銀槽の回転装置が備えられています。実は、レンズは回転せず、レンズを囲むフィルター（スクリーン）が水銀槽で回転している日本唯一の灯台です（写真8）。

鍋島灯台は、不動レンズから放たれた光が、レンズの周りで回転する赤と緑のフィルターを通して、不動赤緑互光の灯火（A I R G 16s）が作られています。かつての放電灯と同じ様な機構です。ただし、不動レン

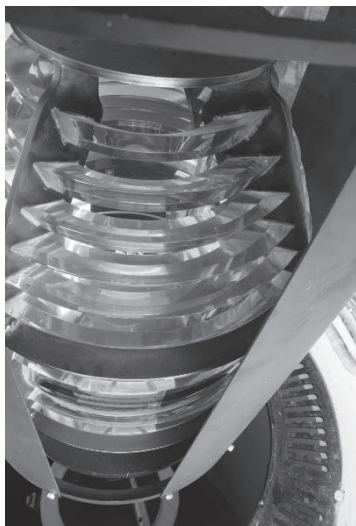
ズに水銀槽があるのも、不動レンズの周囲を色付のフィルターが回転するのも、現在は鍋島灯台だけです。恐らく、世界でも稀なケースではないでしょうか。

燈光会保管の鍋島灯台の経歴簿を見ると、この水銀槽の回転装置は、大正10（1921）年12月15日に設置され、それまでの不動白光から赤緑の不動互光に変更されています。

昭和6（1931）年6月燈台局発行の航路標識要覧によれば、当時四等級以上の不動互光の灯台は、鍋島（四等）、釣島（三等）、江崎（三等）、友ヶ島（三等）、神子元島（一等）、神威岬（二等）、西能登呂（一等）の7基です。その中で、水銀槽の回転装置は、鍋島、釣島、神威岬の3基で、他の4基は銅球式と呼ばれた水銀槽がない機構でした。現在、同型の装置があるのは、納沙布岬（四等）、花咲（五等）、恵山岬（三等）、江崎（三等）、若宮（四等）、禄剛崎（二等）の6ヶ所だけです（写真9・10）。

当時の灯台表（航路標識便覧）を見ると、灯質の解説の中で、互光は次のとおり紹介されています。

互光 Alternating (Alt.) 異色^{おた}（概ネ紅白）ノ光ヲ交互ニ発シ其間ニ毫モ暗黒ヲ挟マサルモノ



写真－9・10 納沙布岬灯台(右)と江崎灯台(左)の不動レンズ付属の回転機構
(右：根室保安部提供)

確かに前記の7基の不動互光の灯台は、鍋島以外すべて紅白の不動互光でした。当時から珍しかった不動赤緑互光の四等級の灯火は、来年で点灯100年になります。今では、ライトアップされた瀬戸大橋のきらめく光や坂出市のまばゆい街の明かりに消え入りそうですが、令和の今夜も、備讃瀬戸航路を行き交う船舶に、休みなく赤と緑の光を投げ続けています。

灯火を守り続けた記録

鍋島灯台は明治期、波節岩灯標(写真11)と中ノ洲・瓦洲の両浮標(資料2の地図参照)を、保守管理していました。燈光会保管の鍋島灯台の経歴簿には、当時のこれらの保守管理方法について次のとおり見られます。

波節岩

一 整理見廻りハ 廣島村字江ノ浦ニ看守人ヲ置キ常ニ展望セシメ又備船ノ設置アリ 水夫ヲ使役シ四日毎ニ看守人本標へ出張シ 諸般必要ノ業務ヲ整理セシメ本台ヨリ八月三回ノ見廻ヲナセリ 然ルニ明治四十二年七月四日装葉燈火燈ニ変更シタルト同時ニ看守人ノ定期出張ヲ廃シ 本台ヨリ七日目毎ニ詰員出張整理ノ任ニ当リ 其^{そのご}后 十日目毎ノ見廻トナレリ



写真-11 当時の波節岩灯標
(大正15年再版「燈台」掲載写真)

一 燈火異変ノ場合ハ 看守人ニ於テ出向復旧スル事ト
ナリ 其^{その}后 郵便ニ依リテ報告書提出致シ居レドモ 看守人ニ於テ復旧不能ノ場合ハ 本台へ態夫船ヲ以テ其
旨報告致ス事アリ

波節岩灯標は設置当時、灯台職員による月3回の定期点検の間に、4日目毎に看守人による必要な業務が行われていたと記されています。また、灯火の異常時には、鍋島灯台職員ではなく看守人が復旧対応まで行っていたようです。同経歴簿には、設置時から明治42

年まで、灯器は石綿灯心の石油灯器だったことが記されています。当時の取扱い資料には、この灯器は10数日間灯火が持続するものと書かれており、鍋島灯台職員による月3回の見廻り期間と合致します。しかし実際には、4日目毎に看守人が現場に赴き、諸作業を行っていたことが、今回新たに確認できました。

高松海上保安部交通課には、鍋島灯台ほか灯台の古い記録資料が多数保管されており（鍋島灯台経歴簿はなし）、今回その一部を見せていただきました。その中で、表題が例規公文簿と記された分厚い綴りには、波節岩灯標看守人心得と称した規定が綴られており、4日目毎の必要な業務の詳細ほか驚きの事実が明らかになりました。

波節岩桂燈立標看守人心得

一看守人ハ看守業務上総テ所轄燈臺首頁^{ようだい}ノ教令ヲ遵^{きようれい}フベシ

一看守人ハ四日毎ニ燈標ニ出張シ 油ヲ注入シ且火口ヲ交換スベシ

一看守人ハ昼夜三回燈標ヲ望見シテ燈火ノ明暗ヲ視察スベシ 但シ天候不穩ノ節ハ屢々^{しばしば}視察スベシ

一 燈火ノ消滅 又ハ不明ナルヲ認メタルトキハ 即時其原因ヲ調査シ燈火復旧ノ手段ヲ施スベシ 燈火旧ニ復シテ異常ヲ見ザルニ至ラバ 其顛末ヲ書面ニテ所轄燈臺へ届出ツベシ 若シ燈火旧ニ復セザルトキハ 直ニ所轄燈臺へ出張シ其旨ヲ報告スベシ

一 燈標ノ毀損 又ハ後日損壞ノ虞アリト認メタルトキハ 速ニ所轄燈臺ニ届出ツベシ

一 燈標へ舩筏其他ノ物ヲ繋ギ 又ハ衝突セシメ又ハ攀躋シ又ハ之汚穢スル者アルヲ認メタルトキハ直ニ出張シテ該所為者ノ氏名、族籍、職業、住所番地ヲ聞

知シ及燈標損壞ノ有無ヲ詳見シ急便ヲ以テ所轄燈臺首員ニ報告スベシ 又近傍燈標ニ同上ノ所為者アルヲ認メタルトキモ同様報告スベシ

一 燈標看守用ノ備品及消耗品ハ常ニ注意シテ破損又ハ紛失セシムベカラズ

一 燈標ハ諸人ノ縦覧ヲ禁ス 但シ所轄燈臺首員ノ許可スルモノハ此限ニアラズ

一 燈標看守用ニ係ル通船賃別使雇料及郵便電信税ハ所轄燈臺首員ニ請求スベシ

一 看守人ハ代理人ヲ予定シ 他行又ハ病氣ノ節、代理セシムベシ 但代理人ノ氏名、住所番地ヲ所轄燈臺首員ニ届ケ置クベシ

4日目毎に灯標に赴き灯火の交換と給油を行い、灯火の監視に昼夜務め、灯火異常時には復旧し報告する等は、正に灯台職員の業務そのものです。看守人は少額の手当てを受け、この保守作業を、点灯開始から明治42年まで14年間も実施していたのです。例規公文簿には、看守人から灯台への灯火異変報告書も多数綴られています。灯器の改良に伴い明治42年以降、4日目毎の保守作業はなくなりますが、灯火異常時の復旧作業や報告は、見回り船が動力化するまで続いていたようです。

この看守人の名は、鍋島灯台経歴簿にも明記されています。明治元年6月27日生、広島江ノ浦在住の長尾二郎氏です。看守人の開始時期は標識の設置開始と同時にです。経歴簿には、彼一人の名前しか記されていないことから、辞めることなく一貫して長尾氏が行っていたようです。

長尾氏は、沖ノ洲、瓦洲の両浮標も明治35年の設置時から看守人を務めています。例規公文簿には、沖ノ洲瓦洲燈浮標看守人心得も綴られており、内容は4日目毎の保守作業が月2回の巡回点検となっている以外、ほぼ同じです。両浮標は明治42年7月に、ガス灯器が設置され、波節岩灯標と合わせて、この両灯浮標

の灯火の確認及び異常時の復旧作業も長尾氏が行なっています。

この頃、巡回の船はまだ伝馬船でした。看守人の務めも大変でしたが、明治42年以降の7日目或は10日目毎に行う鍋島からの巡回点検も大変だったようです。その頃の職員の苦勞が、燈光大正6（1917）年5月号の鍋島灯台職員による記事「鍋島より啓上」に次のように見られます。

御承知の通り本臺には遠近三ヶ所の管理標ありて、定期臨時の出張整理に風浪中を揉まれ揺られて、一日を費やさざるべからず候へば船暈癖の人、中にも本来船嫌ひの人には、聊か不向きなるべく被存候

動力船になった昭和期以降も、海上標識の巡回点検への嘆きは続きます。燈光昭和10（1935）年11月号の記事「鍋島に来て」には、伝馬船の時代の回想と共に次のとおり吐露されています。

最も遠いのは西方八理（約13キロメートル）、廣島の西南一理の海上に浮ぶ瓦洲挂燈浮標であり、途中に波節燈標沖ノ洲挂燈浮標等の管理燈が点在する。

未だ傭船の機械化しない七八年以前は、三艇艫の懸声も勇ましく漕ぎ出したものだ相だが、名に負ふ備讃瀬戸の急流は一度逆流となると動きが取れなくなり、潮待ちを余儀なくされて、瓦洲、波節、沖ノ洲三標整理の爲、午前三時頃に出発して午後十時頃にやつと燈臺に辿り付くと云ふ様な事も珍しくなかつた相である。

現在の鍋島丸には池貝式十馬力ガソリン発動機が取り付けられて、左様な馬鹿げた苦勞はなく大に能率的に成つて居る。其でも尚三標整理の爲には午前七時頃出発して帰臺時刻は午後二時から三時頃になる実状である。

慣れぬ内は整理して帰臺後、故障なくて呉ればよいが、ガスは漏洩せぬだらうか、導火は適當であつたか、タイムは正確を持続するか、など実に一苦勞である。

記事が書かれた昭和10年当時、この3基の他に三ツ子島灯台と牛島灯標も管理していました。

昭和17年の春には、灯標2基（六口島・久須美鼻）と灯浮標1基（豎場島）が更に増え、管理標識は計8基に至ります。職員2名のまま、これら管理標識の10日目

毎の巡回保守のほか、相次ぐ灯火異常の緊急対応、毎夜の灯火確認、昼間は通過船舶の記録、気象観測も日に4回行っていました。昭和19年7月を最後に、視察船による物資の供給は途絶え、再三の切なる要望も届かず、昭和21年には遂に各標識が次々と消灯していきます。燃料の欠乏で見回り船も出せず、灯浮標は流失しても何ら措置できない悲痛な報告が残されています。翌年には、ようやく燃料が供給され各標識に赴くと、灯器やレンズがなくなっています。物資不足による転売を目的とした灯台の盗難でした。同報告(写真13)に対する本局からの回答は、燃料欠乏を理由に巡回せず放置し積極性に欠



写真-12 現在の波節岩灯標
(本年9月ドローン撮影 高松保安部提供)

く業務姿勢が要因だとの、厳しい注意文書が出されています。この昭和17年7月から昭和26年4月までの戦中戦後の激動の約10年を、灯台長「池田介福」が交代せず務めあげています。補員は短期間で次々と辞めてゆき、その報告書も池田氏が作成し続けており、彼の心身の苦勞は想像以上です。

昭和33(1958)年6月、鍋島灯台を含む管理標識19基、職員4名体制の鍋島航路標識事務所が鍋島の地に発足します。その後、昭和40(1965)年4月から管理標識も含め丸亀航路標識事務所に集約され、鍋島灯台は滞在管理となります。そして平成3(19

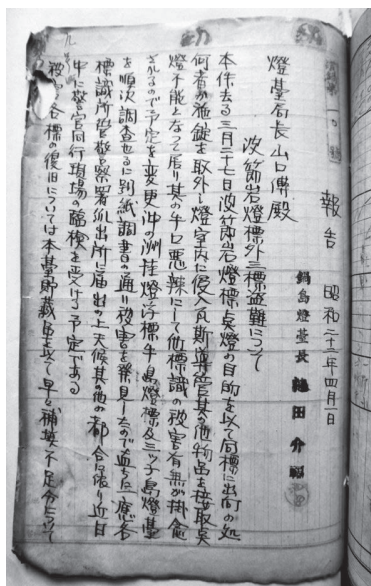


写真-13 灯標盗難報告書(高松保安部保管)

91) 年3月に、滞在管理も解消され、鍋島灯台は無
人化されます。翌
年に退息所は、高
松市の四国村に売
却移設され(写真
14)、現在、鍋島
には灯台とコンク
リート造の倉庫だ
けが淋しく寄り添
って立っています。

与島は、瀬戸大
橋が架けられた
後、多くの住人が島を離れ、灯台の家族が洗濯や通学
など毎日行き来していた浦城集落も、灯台に人が居た
頃のことを知る人は、もうほとんど居なくなっていま
ったと、静まり返った同集落を案内しながら濱本所長
が話してくれました。

与島を訪れた後、猛暑の中、広島へも向かいました。
マニラ号の士官レキの墓と、広島にある波節岩灯標旧
燃料庫(写真15)の確認のためでした。島では、丸亀



写真-14 四国村の鍋島灯台旧退息所
(平成31年4月撮影)

市広島市民センター関野真樹所長から、レキ研究会の
横瀬実会長を紹介いただきました。レキ士官の話や波
節岩灯標のことを同センターでお聞きした後、まだ調
査途中の長尾二郎氏の記録の一部をお見せしたところ、
レキ士官の墓標の見学後、共同墓地に眠る長尾氏
のもとへ案内いただきました。墓標(写真16)には、
長尾氏の功績が次のとおり刻まれていました。



写真-15 波節岩灯標旧燃料庫
(本年8月撮影)

明治廿八年波節岩燈台建設ニ尽力シ落成ト
共ニ看守人拜命以後逝去マデ五十五年ノ長期ソノ職

務ヲ尽ス 明治四十五年十七年勤続表彰 勤功章一級下賜サル

昭和廿五年三月卅一日逝去

逝年 八十二才

波節岩灯標を建設の時から半世紀以上に亘り、生涯身をもってその灯火を守り続けた、長尾二郎氏の功績は、波節岩灯標がこの世にある限り、歴史に埋もれさせてはならないと、墓標に手を合わせながら強く思いました。

平成元（1989）年5月、丸亀市・笠岡市・土庄町・小豆島町が共同で申請した、せとうち備讃諸島をテーマとする「石の島」のストーリーが日本遺産に認定され、石の産地を支えた海運の史跡として、波節岩



写真-16 長尾二郎氏の墓標
（本年8月撮影）

灯標と波節岩灯標旧燃料庫（石造）が日本遺産に指定されています。

鍋島灯台は、平成21（2009）年2月に経済産業省から、我が国の海運業等を支えた灯台等の建設の歩みを物語る施設として、近代化産業遺産に認定されています。

両標識の名誉ある認定は、広く周知され、多くの人に届けられています。対照的に、両標識の大恩人である池田介福灯台長と看守人長尾二郎氏の記録は、ほとんど知られることなく今日に至っています。御二人の功績は、今日の鍋島灯台の明かりのようです。令和の光り輝く夜景の中で消え入りそうな明かりですが、決して消灯させてはいけな^い、いつまでも大事に見つめていきたい尊^{とうと}い光のように、愚生には感じられました。

（明治の灯台の話62 鍋島灯台）

高松海上保安部保管の多くの貴重な記録資料の閲覧を、快く承諾いただいた小谷実交通課長には、この場を借りて改めて感謝いたします。

― 明治の灯台の話 ―

(30) から (61) 話までを

振り返り (前編)

灯台研究生

30話を区切りとして平成21(2009)年3月に、1〜29話までを振り返り、当時書けなかったことや、その後分かったこと、作成秘話なども書き留めていました。前回の屋形石灯標の話で61話目となり、30話から61話までを再び振り返ってみようと思います。番外編や最長4回に分けて書いたものもあり、10年以上の月日が経過し忘れたことも多く、もう少し早く振り返るべきだったと後悔と反省しきりです。

30 横浜北・東岡水堤灯台(2009年5月号)

日本初のコンクリート使用の防波堤に建設した日本最初の防波堤灯台。北水堤灯台は、横浜市民に赤灯台と親しまれ、今も点灯開始当時の鉄造のまま横浜港を照らし続けています。東水堤灯台は、豪華客船の衝突事故により破断倒壊し、その時の写真は衝撃的でした。今は山下公園氷川丸係留桟橋に記念灯台として移設保



写真1：横浜駅改修工事の防護幕に点灯120周年と紹介される
(平成28(2016)年12月撮影)

存されています。拙稿を書いたのは横浜開港150周年の2009年。7年後の2016年の灯台点灯開始120周年の記念の年に、横浜保安部勤務となり、5月の点灯記念日には灯台女子3名を招きマスコミへの大広報を行い、11月の灯台記念日には横浜ポータルで記念講演会を開催しました。これらが出来たのは、この時の拙稿が大きな心の支えとなっていました。

北水堤灯台は、2009年にLED化され、取り外したレンズは保安部玄関ホールに展示されていました。そのレンズを調べると、横浜標識製作所という地元横浜に存在した灯台レンズメーカーが明らかに、創業者の子孫の方と巡り合い、それらの事実が神奈川新聞に掲載されたことは愚生の横浜の一番の思い出です。

31 天保山灯台と

大阪南北突堤灯台（2009年6月号）

大阪最初の灯台「天保山灯台」と、同灯台廃止後にできた「大阪南北両突堤灯台」。天保山灯台は、明治43年に廃止され、短命で記録の少ない幻の灯台です。当時多くの絵葉書が発行されていることから、絵にみる灯台として人気があったようです。

二代目大阪南北突堤灯台は、昭和の灯台技手「三浦忍」の傑作です。燈光に、同灯台と三浦忍を絶賛する



資料1：二代目天保山灯台の絵葉書

記事が異例の半年に亘り掲載され、突堤（防波堤）灯台としては東洋一の偉容を誇るとまで書かれています。大阪港の拡張工事により、両灯台とも今はもうありません。旅館かと見間違うと形容された至れり尽くせりの灯台内部を一度は見ておきたかったです。

32 和田岬灯台（2009年8月号、9月号）

不自然な告示の記載から、和田岬と天保山灯台に設置予定の四等レンズは、部埼と六連島灯台に優先して設置されたと推理しました。各灯台のレンズの変遷は、いつか整理しなければならない課題です。

どこを探しても出てこない大阪条約の条文。日本燈台史にも、詳細はなく約定と書いたり（11頁）、条約としたり（14頁）曖昧で、灯台の機器購入の交渉記録しか確認できないことから、改税約書（江戸協約）のような正式な条約ではないと結論付けました。拙稿提出時に、この件を説明した際、強い口調で一方的に「それでも大阪条約はあるんだよ」と反論され、人の既成概念を変えることの難しさを実感しました。

室戸台風での大被災、灯台は幾多の自然災害に見舞われ、職員や家族たちの命がけの救出劇が繰り返されてきました。それらが詳細に綴られてきた燈光は、自

然災害の歴史をたどる上でも、貴重な記録資料と思われず。

33 入道埼灯台（2009年10月号）

おとぎ話の水晶球に相違ないと記者を魅了した初代入道埼灯台の一等レンズ。面が24面もあった日本一の多面レンズでした。レンズを回転させる装置は、コロを使用する轉轆式^{てんらくしき}回転装置。入道埼灯台は最後の轉轆装置の灯台でした。ゆっくり回転する水晶球のレンズを一度拝んでみたかったです。

入道埼灯台には、2004年の夏に家族旅行で一度だけ訪れました。真夏でしたが、肌寒かったことを覚えています。明治の真冬の転勤道中記は、当時の灯台への異動の過酷さが身に沁みて伝わってきました。

入道埼灯台の台長婦人であった渡邊治恵様とは、下田海上保安部勤務時に仲睦まじい老夫妻のご様子でお会いた以降、何度も文を交わし、自宅にもお邪魔し、灯台生活のさまざまなことをお伺いしました。

「いろいろな悩んでつらいことがあっても、灯台の光が回っているのを見ると、すーっとした」

この言葉は、老いても芯がちゃんとしていた渡邊様の面影と共に、永遠に愚生の脳裏に焼き付いています。

34 経ヶ岬灯台（2009年12月号）

燈光会に保管の大判の経ヶ岬灯台の写真が、写されている状況や人物から、設置当時のものではないかと推測いたしました。その後、地元の京都新聞に同写真が大きく取り上げられ、目にしていた明治期の灯台の写真が、みな貴重であることを再認識いたしました。

経ヶ岬灯台は、前例のない型破りな記録の連続でした。設置当時、海面からの高さ日本一、光力も日本一、積み上げられた大量の巨石、灯台の内装の凄さ、そして初の一等閃光フレネルレンズと水銀槽。この水銀槽の歴史について、フランスの灯台歴史書を読むと、開発者の名前や年代など日本にある当時の記録と異なることが判明し、大変な作業ではありますが、原書を認めることの重要さを教えられました。

暗闇を照らす経ヶ岬灯台の光芒は、保安学校の滞在实际時と家族とともに見た時と、歳を経ても感動は変わりませんでした。今は、暗弧板も取り外され、全周を駆け巡る光芒は、壮観な眺めだと思われず。

35 美保関灯台（2010年1月号、2月号）

明治の山陰新聞と松江日報には、美保関灯台の建設

前の測量調査から建設中の詳細、そして完成時の祝賀会の様子まで、多くの記録が残されていました。

建設途中に技師となり台湾に渡り、台湾の灯台建設に従事した大澤正業技手の最後の日本の灯台でした。

形状は、円筒形の灯塔に半円形の付属舎がある往年のブラントン型の灯台です。同時期に設置の経ヶ岬灯台は、明治の大技手山本哉三郎が手掛け、形状は潮岬灯台に類似し、こちらはブラントン後任のマクリッチ型と捉え、隣接する二つの灯台を、お雇い外人と共に灯台建設に関わった技手による、明治初頭の石造灯台の復活と称しました。

2008年11月に灯台を訪ね、初めて通信省のマークや伝声管を目にしました。多くの灯台を見ていくと、見慣れないものは、すぐ目に留まります。それらは、古びた構造物の一つに過ぎませんが、その灯台に多くの人が携わり、様々な過程を経て、今日あることを理解していると、見過ごしてしまいそうなくっけな存在が、堂々とした灯台のたたずまいよりクローズアップされ、感動や愛おしい思いまで与えてくれます。

美保関灯台の古びた伝声管に、「だんだん」という言葉を発したのは、自然と湧き出た、あふれる思い、そのものだったような気がします。

36 出雲日御碕灯台

(2010年3月号、2011年1月号)

前編と後編の間に、次の水ノ子島灯台を書き上げることになった異例の作です。理由は、書き上げた後編の大幅な修正指示でした。なかなかまとまらず、諦めて次の水ノ子島を完成した後、再度奮起して翌年の掲載となりました。

前編は、出雲日御碕灯台が日本一の灯台として誕生した理由を、当時の世相と老技手宮谷佐吉の存在としました。

灯台の二重壁構造の疑問を調べていく上で、出雲日御碕灯台が外壁は砂岩で目地もスカスカで、内壁の堅固なレンガ積みで建っているという事実を知りました。その二重壁構造が、ブラントンの多くの灯台に採用されているのに、帰国報告書の「JAPANESE LIGHTS」に記されなかったのは、彼が認知していなかったとしましたが、その後の調査で、19世紀中頃のブラントン以前のアメリカのレンガ灯台の多くに見られ、彼が特筆するまでもなかったことが判明しています。

日本一の出雲日御碕灯台の設計は、宮谷佐吉ではなく、山本哉三郎としました。彼が次々と二重壁構造の

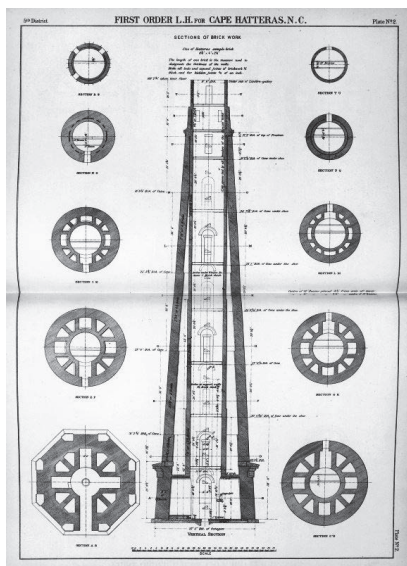


写真2：伊藤武夫氏と家族、長男の稜夫君(左)

昭和16年頃の出雲日御碕灯台構内にて

灯台を手掛け、誰よりも知り尽していたことや、工事開始の約1年前に同地へ出張している記録を見ても、その答えは必然でした。

後編は、灯台の参観事業の変遷、灯台の字、灯台の電球の始まり、出雲日



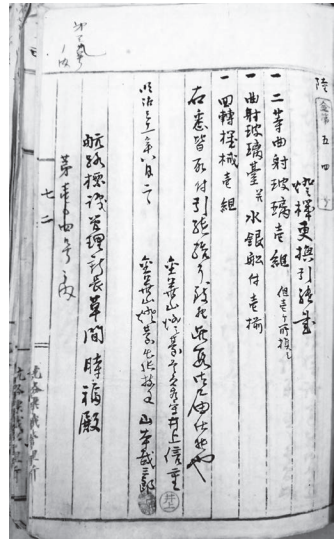
資料2：Cape Hatteras Lighthouse 1869
(US Lighthouse Society提供)

御碕灯台のコンクリート造改築計画、最後は故村松貞次郎先生の明治期灯台への名言で締めくくる、かなり力作の書き直しでした。書き直す前の没になった伊藤武夫氏（出雲日御碕灯台職員）と家族の話は、60話の安芸白石灯標の話で形を変えて復活させました。掲載できなかった出雲日御碕灯台での伊藤家族の写真を掲載し、ご冥福をお祈りします。

37 水ノ子島灯台（2010年5月号、8月号）

水ノ子島灯台ほか明治30年代の多くの瀬戸内海周辺の航路標識は、海軍から要請を受け設置されています。東京恵比寿の防衛省防衛研究所で、その要望書を見付け現物を手にした時、緊張と興奮で頁がなかなかめくれなかったことを覚えています。要望書は現在、データベース化され、インターネットで簡単に見ることができですが、不便な時代だったからこそ、見付けた時の感動が今も忘れられないのかもしれない。

明治の大技手 山本哉三郎の集大成であった水ノ子島灯台。山本哉三郎の記録は、すべてが明治の灯台の歴史に結び付いています。本年5月、灯台フォーラムが企画したテレビ会議システムによるオンライン講演会にて、彼の功績を詳しく紹介することができました。



資料3：金華山灯台水銀槽設置記録
(東北歴史博物館委託保管
金華山灯台例規公文参考簿より)

視聴された皆様の仰るとおり、彼の功績は内容も量も十分に、本になり得る価値のあるものです。

水ノ子島灯台は、ただ大きいだけではなく、他の灯台にはない様々な工夫が凝らされた見どころ満載の灯台でした。四本足の水銀槽は、出雲日御碕灯台だけと記しましたが、金華山灯台にもあることを後年確認しております。なお、同水銀槽は、経ヶ岬灯台よりも早い明治31年8月に設置され、この工事にも山本哉三郎が携わっている記録が確認できています。

水ノ子島灯台から欠くことのできない台風の被害記録は、大分の水ノ子海事資料館の大量の記録資料、職員の実験記録、暦年の公式の気象報告書から徹底的に調査しました。今からちょうど10年前、家族5人で過ご

した最後の年、公私ともに日々多忙で、次々と難問の連続で、もがきながら拙稿を作成していたことを当時の日記から再確認しました。逃げ出したくなるくらい大変な毎日だったのに、今はその頃の日々が無性に愛おしく感じられます。

灯台建設時の人柱の話が、昭和の初め頃まで本当に信じられていた程、そのすべてが尋常ではない凄すぎる大灯台です。水ノ子島灯台は他の灯台とは比較にならない別格のナンバーワンです。

38 姫島灯台（2011年2月号、3月号）

慶長10（1605）年に点灯の日本最初の燈明台が前身とされる姫島灯台。水ノ子島灯台と建設時期や設置場所がほぼ同じで、石造灯台であることから、両灯台の石材の産地、構造、灯器などを比較し整理しました。その中で、チャンス式石油蒸発白熱灯器をアメリカ製としているのは間違いです。正しくはイギリスチャンス&ブラザーズ社製、開発者は同国のアーサー・キットソン（Arthur Kitson）です。

後編は冒頭に、大正初期の姫島灯台長の写真を掲載。岩田亀作、当時の燈光の大家連「岩田春風」氏です。初期の燈光を見ていくと、その名はすぐに覚える程、

彼の記事は数多く見られますが、写真はどこにもなく、彼の面影は不明のままでした。燈光会保管のスクラップ帳で偶然見付け、燈光に必ず載せてあげたいと思いは、この姫島灯台の拙稿で実現できました。

当時燈光会の囑託であった写真家の野口毅様と九州各地の灯台を巡ったのは平成21(2009)年でした。灯台の訪問は、所管の交通課の定期巡回に合わせて行ったため、滞在時間は限られ、どの灯台も正に走り抜けるような感じでした。短時間の調査でしたが、その時の現地での刺激的な体験が、拙稿の強い原動力となりました。拙稿に対しお褒めの言葉をいただくこともあります。拙稿に自分一人の力ではなく、あの時の皆様のご協力、その後の関係資料の提供があつてこそ、内容のある拙稿が出来ているものと確信しております。

39 関埼灯台(2011年4月号)

大分の三灯台の最後。水ノ子島、姫島両灯台より最初に建てられた理由、妙な設置場所、長期の工事期間、唯一鉄造であったことなど意外尽くしの灯台を、記録文書から探ってみました。

絵葉書や写真に写る関埼灯台官舎は、海を臨む高台の別荘かコテージのようにも見えますが、実際の生活

は過酷極まるものだったことが、残されている記録から明らかでした。

意外尽くしの最後は、訪問時の印象。あれから10年以上過ぎていますが、純白の眩しすぎる姿が、脳裏に焼き付いています。明治の鉄造灯台と聞けば、百年以上過ぎて、錆びてボロボロというイメージが浮かびますが、三灯台の中で一番輝いていました。明治の灯台を後世に伝え残そうとする補修仕事を担当した先輩方の強い意気込みを感じました。さて、10年後の今、果たしてどうなっているでしょうか。

40 三重城灯台(2011年5月号)

平成22(2010)年10月からの3年半、沖縄に勤務し、そのとき巡った沖縄・南九州の灯台を、忘れぬようにと拙稿にまとめていました。

初代三重城灯台は、戦災で失われています。愚生の赴任時は、灯台跡地の脇に、コンクリート造三階建ての那覇信号所と拝所うがんじゅが立ち、レンガ造の灯台があつたことなど想像もできない状況でした。信号所には点検保守のため頻繁に訪れており、拝所うがんじゅへ参拝に来る多くの地元の人達を目にしました。拙稿を書いた後日、勇気を出して、拝所うがんじゅへ来ていた年配のご婦人に、レン

が灯台のことを尋ねてみました。ご婦人は、戦後に島から来た人で、分からないと答えた後、目を閉じて何か呪文らしき言葉を唱えた後、草むらを指差し、「そこにあつたと神様が言っている。あなたはなぜそれを知っているのだ」と、逆に怪しがられた予期せぬ体験をしました。その草むらには、レンガ造の灯台の基礎が残されていることを、その直前に確認したばかりで、痕跡は余程目を凝らさないと分からないものでした。

同勤した地元沖繩のU官は、周囲も認めていた霊が見える人でした。某灯台の点検の際は、入口に兵隊さんが坐っているからと、必ず呪文を唱え、手で十字を切るような仕草をした後、扉の開閉作業を行なっていました。沖繩には、こういう方たちが多くいること、^{みかじ}拝所も町中を5分も歩けば必ず目にするほど、それまでの勤務地とは全く異なる環境でした。幽霊も神も信じてない愚生が、そういう世界もあるのかと受け入れ、燈光に残る多くの幽霊体験記や神秘体験記にも、ちゃんと向かい合おうと思い始めたきっかけでした。

41 津堅島灯台（2011年6月号）

沖繩の最初に建設された灯台。鉄造灯台ですが、レンガの記録とレンズの行方を探し求めていた印象です。

沖繩赴任前に、津堅島灯台跡の調査を依頼され、本部M整備課長と行ってみると、想像以上のレンガ遺構群に目を疑いました。その後、聞き取り調査のため、島には二回赴き、レンガの塔は灯台の台座跡であったことが判明しましたが、行方不明のレンズは、誰に聞いても存在すら知られていませんでした。その後も沖繩のOBの方と会うたびに尋ねてみても同じでした。レンガ遺構は、沖繩最古のレンガの構造物の可能性大ですが、今回、ネットで検索しても、関連の調査報告書を見付けることはできませんでした。

ハチの巣状の無残な灯台の写真を入手したのは、沖繩を離れる直前でした。破壊尽くされた先原埼灯台の写真を最初に目にしたときと同じ、そのタイミングに

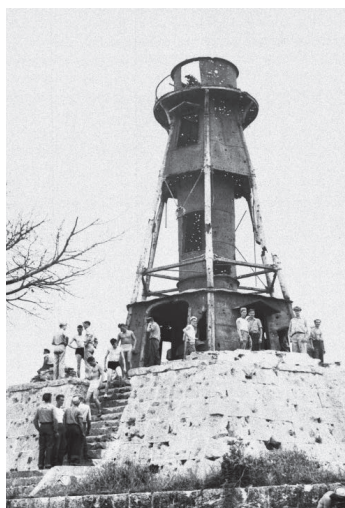


写真3：米兵と破壊された津堅島灯台
（沖縄県公文書館所蔵）

偶然ではない何か運命的なものを感じていました。

42 釣掛埼灯台（2011年8月号）

串木野保安部に大量の釣掛埼灯台の手書きの記録資料が保管されていたのは想定外でした。燈光や灯台公報など印刷された古い記録資料に見られる、釣掛埼灯台の月虹の観測、初代灯台長の殉職の事実が、それらには当時の職員直筆で記録されていたのです。製本された記録資料では決して感じるものがない、大先輩たちの息づかいが伝わってくるものでした。それら貴重な記録資料が、今も同保安部で大切に保管されていることを、当時は交通課の主任官で、今も又同保安部に勤務するK次長から確認できました。釣掛埼灯台がある限り、未来永劫残していくべき、何物にも代えがたい釣掛埼灯台の貴重な資料だと思われます。

初代灯台長の墓碑は行方知れずで、それを愚生が現地ですぐに見付け出せたことに、霊やお導きがあったのではと考えたりもしましたが、それはあり得ません。調査の中で、その人のことを長く調べているうちに、名前や漢字のシルエットが、自分の潜在意識に記憶され、同じような映像が目に飛び込んできた瞬間、その潜在意識の記憶とすぐに結び付き、簡単に見付けられたの

ではないかと、後日分析いたしました。なんでもかんでも霊や神様が教えてくれるなら、こんな苦労はないでしょうし、見付けたときの感動もないはずですよね。

43 鞍埼灯台（2011年9月号、10月号）

日本最初のコンクリート造の灯台を、当時高価なセメントを使わず、石灰のみ使用のコンクリート造灯台ではないかと、当時の財政難だった背景や、構造を三和土とする告示の表現などから推理しました。しかし、航路標識管理所第三年報の官設航路標識建築費一覧表（253頁）を見ると、鞍埼灯台は明治10年代の灯台の中で一番高額（5万5073円）で、ブランドン的大型灯台の角島（4万7037円）や犬吠埼（4万4824円）よりも、はるかに費用をかけた灯台でした。廉価のため三和土造りにした明治10年前後の灯台官舎とは異なり、高額な建築費は、輸入セメントを使用していたことを想起させるものでした。当時の燈台局長だった藤倉見達が、その後英国土木学会会員になることから、局長時代に時代遅れの灯台を作らせたとした愚説を、この場を借りて訂正したいと思います。

最後の灯台暮らしの悲哀は、家族が亡くなる不幸な話を詰め込み過ぎです。今読み返すと、心が折れそう

になるぐらい辛くなり、あの時だから書けたのだと痛感しました。東日本大震災で犠牲になった多くの幸せだった家族の話が連日報道され、不幸の話に麻痺していたのだと思います。もう二度と書きたくない、拙稿一番の辛く悲しすぎる記事です。

44 六連島灯台（2011年11月号）

灯台と皇室との記録が数ある中で、最初の行幸の灯台は、この六連島灯台でした。西郷隆盛らを伴い訪れた行幸を記念し、立派な記念碑が構内に建てられています。それとは対照的に、灯台と廃墟の信号所だけが立つ構内は、淋しさと物悲しさが漂っていました。灯台の家族らで賑わう百年前の六連島灯台の平凡な日常を記した「夕暮れの三十分」は、郷愁の思いを駆り立てます。何度読んでも、胸に迫るものがあります。

六連島灯台は、小さなビーコンレンズが設置されていました。それまで訪れた九州各地の明治期灯台は、すべてフレネルレンズだったため、燈籠の大きさとは不釣り合いなビーコンに、強い違和感を感じました。

近年、灯台は地域の観光の目玉として活用できないか検討されています。明治期の石造灯台、しかも栄えある記録が残る灯台には、歴史を経て風格のあるフレネ

ルレンズが、やはりぴったりののではないのでしょうか。保守は面倒になりますが、効率性ばかりを重視せず、航路標識としての機能より、伝統ある形を後世に伝え残していくことも、社会が激変する今だからこそ、なすべき大事なことのようには思われます。灯台に家族らが戻ることはもうないですが、フレネルレンズの光芒を灯台によみがえらせることは可能なはずです。

45 部埼灯台（2012年1月号）

明治期、レンズが次々と変更したのは、パワーアップしている感じで、部埼が重要な場所と認められていた証です。今のレンズは、日本唯一の連成不動閃光式フレネルレンズ。下帯がある完全なものだったら、その装いは豪華絢爛な輝きを振る舞っていたはずで

す。ブラントンの二重壁構造の灯台は、御前埼も含まれ、部埼と合わせて計4基です。他の3基は、皆レンガ造の灯台で、なぜブラントンの石造灯台で部埼だけが二重構造なのかは、まだ不明です。レンガ灯台の二重構造については、同型の灯台が多くあるアメリカでは、防湿対策とコスト削減措置であったことが、米国航路標識協会（US Lighthouse Society）から確認済です。

美しき部埼灯台の歌とは対照的な部埼灯台生活者の

哀れな実態を結びにしています。僧清虚の巨像といい、今あるものがすべて素晴らしくて、拙稿を書いていたとき、「当時の灯台はそんなじゃなかったんだ」と訴えたい気持ちが強かったようですが、耐え忍んだ部埼灯台生活者らの名譽のためにも、あの惨めな記事は、燈光誌面に再び晒すべきではなかったと、今拙稿を読み返し自分の拙さを恥じています。

46 白洲灯台（2012年2月号）

ブラントンの帰国報告書「THE JAPANESE LIGHTS」の灯台添付図誌面の半分以上が、木造白洲灯台で占められています。しかし、同書には、その図の説明文がありません。この矛盾を推理し、灯台は日本人製作としました。四角形の木造灯台には、お雇い外人の影が見えず、日本人の記録ばかり目に付くのは、やはり思い過ごでしょうか。

電動回転灯台については、拙稿60の安芸白石灯標でも再掲載しましたが、発電機の設置に関しては、まだ明確な記録が見付からず不明瞭な点が多く、拙稿に対し納得がいけない内容です。今後も、調べ続けるテーマです。

関門海峡の拙稿の最後の一編。ただし、白洲灯台だけは訪問していません。書く動機は、職員殉職の記事

でした。拙稿を書いた前年に、後輩の殉職事故がありました。書いた2011年は、東日本大震災発生直後の映像を連日何度も目にし、命の尊さを身に沁みて感じていました。東北から遠く離れた沖縄に居ても、灯台の記録を通して、命の尊さ、後輩の事故の教訓を伝えられないかと、拙稿の最後に震災の報道と関連付けを取り上げました。後輩の殉職記事に関しては、内容が強過ぎて没になっています。没記事を今読み返すと、前回同様、自分の拙さ、若気の至りを痛感し、恥ずかしい限りです。

47 佐多岬灯台（2012年3月号、4月号）

大輪島という島にある佐多岬灯台。拙稿では、設置当時の引用文が候文で読みづらく難解だとの指摘に、現代語に訳した解説文を付け足し、途中で息切れして、かえって読みにくくなってしまいました。

ブラントンと灯台建設で対峙した中澤孝政が、この佐多岬灯台の難工事に長期間携わっていたことを取り上げました。日本人の器用さ、技術習得の早さ、好奇心と独立心の強さは、お雇い外国人たちも認めていたようです。当時の日本人の質の高さや底力を、灯台建設の記録やお雇い外人と灯台職員とのやりとりから実

感できます。

昔だから今より劣っているなんて到底思えない。むしろ、彼らの方が、あらゆる面で、今より

も勝っているようにも見えます。

前編の最後に掲載したゴンドラの写真は見づらく酷評でした。燈光会保管の灯台写真帖の鮮明な佐多岬灯台の写真から、ゴンドラの写真を再掲載します。吊り下げられたゴンドラに、左向きでうずくまっている人らしき姿が見えますが、ゴンドラの手前側の枠がないため、それが見えるわけで、この写真は、ゴンドラに人が乗っているのを^{なか}恰も写すために、わざと枠を外しているとしか考えられません。

拙稿を書いた後、次の勤務地の下田で、明治期の灯台職員の子孫宅から見付けた当時の絵図には、記録文書のとおり、ゴンドラが中継地の島伝いに渡されていた様子が描かれていました。

柿山様の十年間の佐多岬での生活は、異動させられ



写真4：灯台職員交替用のゴンドラ
(燈光会保管写真より)

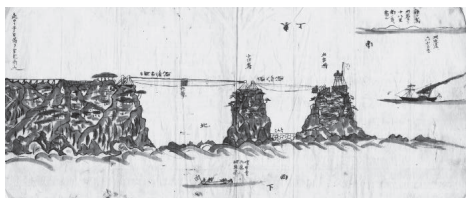
ない何か理由があったにしろ酷^{ひど}すぎます。こんな無情な手記を書かせる当時の灯台人事が許せません。

灯台と官舎の訪問は強烈過ぎる印象でした。特に忘れ去られた官舎探しは、正にジャングル探検。密林奥深くに現れた石造官舎は、映画インディジョーンズに出て来る世界そのものでした。拙稿を読み返すと、今もその時のワクワク感と感動がよみがえります。

封印された初代の灯台が二代目の灯台の中で、本当に守り続けていた事実。古い灯台は単なる構造物ではなく、奇想天外の宝庫であることは間違いありません。

48 屋久島灯台（2012年6月号、8月号）

条約灯台の候補とされた三本嶽・レッドフィールドロックが、屋久島なのか銭洲なのか、真偽はその後とも判明していません。屋久島は絵図面がありますが、標高千メートル以上の山に灯台を建てることはあり得ま



資料4：佐多岬灯台のゴンドラ設置の絵図
(下田市 菊池義臣氏所蔵)

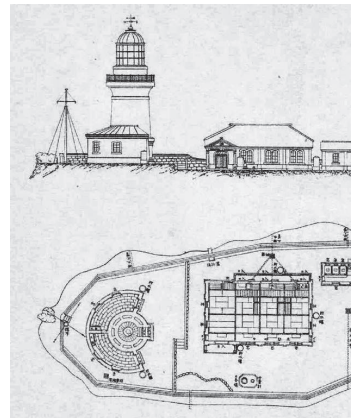
せん。銭洲は、パークスの申立書と根本的に位置が違います。果たして、その場所はどこなのでしょいか。

拙稿を書いた後、屋久島灯台設置当時の図面を見付け、構造は二重壁であることは確定しました。同時期に建設の釣掛埼灯台も同様です。レンガ灯台は、小型のものを除き、多くが二重壁構造だったことが明らかになっています。現在、確認済の二重壁構造のレンガ灯台（設置年）は次の6基です。

・御前埼（明治7年） ・犬吠埼（明治7年）
・尻屋埼（明治9年） ・釣掛埼（明治29年）
・屋久島（明治30年） ・塩屋埼（明治32年）
石造灯台の二重壁構造は次の3基です。

・部 埼（明治5年） ・出雲日御碕（明治36年）
・水ノ子島（明治37年）

灯台の器械の異音に気付いた平成のベテラン職員が、その場で若手職員に教授する技術の伝承。灯台の保守業務は、拙稿を書いた当時より更に深刻になっています。当時から、この現状は予想されていました、その流れを止めることは出来ず、今後もっと悪くなることは皆の共通の認識です。今も技術の伝承は各地で行っていますが、海保の他の業務に比べれば、灯台の保守は見栄えのしない地味で冴えない業務の印象は否



資料5：設置当時の屋久島灯台の図
（臨時台湾電信灯標建設部報告書より）

めません。しかし、灯台は単なる構造物ではなく、夜の海では航海者たちに安心感を届け、地域の人々には長く愛され、歴史ある建造物として地域の歴史でもあることを再認識すれば、他にはない重要な存在であると気付くはずです。過去から先人が守りとおしてきた灯火を、次の世代に引き継ぐ大事な仕事を自分たちが担っていることを、スマホ世代の若者たちが理解し、使命感をもって臨むことを期待します。単なる器械、施設の保守ではなく、航海者や地域の人達の寄せる思いと歴史も保守しているのだと思えるよう、拙稿がその一助になればと願うばかりです。

(30)から(61)までを振り返り（前編） 終り



写真-1 宮古島ロラン航路標識事務所開所 第十一管区海上保安本部長による事務所看板設置



写真-2 第十一管区海上保安本部長及び事務所職員

引き継ぎ式典を終え私達海上保安庁の責任による運用になった宮古島ロランステーションには直ぐ第十一管区海上保安本部長の手で宮古島ロラン航路標識事務所の看板が掲げられ宮古島ロラン航路標識事務所は発

その3 宮古島ロラン航路標識事務所発足と整備、家族の来島



足となった。日本国の海上保安庁としての第十一管区海上保安本部（以後十一管本部）の組織も型どおりであったと思うが発足した。十一管本部の発足を内外に示す意味もあったのだろう。記念の文鎮も作られ内外関係者に贈呈され、50年を経て私の机の上で役割を続けている。

私達のロラン局引き継ぎも無事に完了したもののロランシステム機器は先に触れたように旧式で老朽化が進んでいて本格的な整備が問われている状況であり本庁、十一管本部においても予算的課題として計画が進められていった記憶が残る。事務所の看板はロランステーションの隊舎に掲げられたが勤務地としての事務所及び宿舎は整備が必要である。全てが予算処置等の課題が山積する中であり私達事務所の業務を超えてい



写真-3.4 第十一管区海上保安本部 発足記念文鎮（表）
（裏）には沖縄復帰の日付47. 5. 15

て本庁、十一管本部の力でないと進まなかった。

まずもつての課題は職員10名の寝食を中心とする生活であり業務の範疇を超えて朝、昼、晩の食事をどんなものにするかである。所長以下10名の職員の中で単身者は当然コーストガードの隊舎でそのまま暮らすことは自然の流れであるが、家族持ちは順次家族を呼ぶことが必要であった。しかし当然のことであるがロラン、デッカに整備されている近代公務員宿舎は無い。所長、次長は本庁、十一管本部の計画に沿って事務所用地、宿舍用地の確保に町中を東奔西走、同時に順次来島する家族のために賃貸住宅の確保に邁進されていた。しかし賃貸住宅は簡単には確保できず基本的には全員がコーストガードの隊舎での共同生活である。

無線業務の当直、隊舎の維持管理に加えて、食事当番、食料購入の役割を決めて共同生活が始まった。コーストガードの隊長は私達海上保安庁の引き継ぎ要員10名が自分たちで料理を作り共同生活をする事に心配されていたのか、先にも紹介した米国の補給体制の下、宮古島ロランステーションとして最後の補給便で冷凍庫、冷蔵庫に肉、野菜を可能な範囲で沢山補給してくれていた。冷凍肉などは、その年の夏に着任到着した家族にも味わってもらえるぐらい沢山の量が冷凍庫に

保存され、有難い配慮であり、米国の世界戦略としての補給体制に感心すると同時に米国及び米国人の暖かい心に西部劇の映画を思い起こした。

車は、町中から遠く離れたロラン局での業務展開、生活に必需品である。引き継ぎ後、早々にロラン航路標識事務所をよく使用されていた青色の三菱ジープが配属され、そのジープで町中の宮古島市内の市場へ野菜等の調達に出かけた。ところが、道路交通法はアメリカ方式のまま「人は左、車は右」である。私達、運転者は意識していても感覚的に「人は右、車は左」となる特に4つ角交差点で右折左折の時が大変で、ハンドルを切り曲がると自然に反対車線に入っていく運転となりヒヤリハットどころか命がけの連続運転。所長、次長は大変心配しておられて、運転は必ず助手席に同乗者を乗せ2人運転を強く指示され、1人運転は禁止であった。人の感覚は面白いもので、助手席に座っている者は米国方式に違和感は少ないのである。復帰してもこのアメリカ方式の通行方法は1年以上続き、その1年の間に道路交通標識、信号機の改修準備が行われ、翌年の8月に「人は右、車は左」への車両通行変更が実地となり標識の明示、信号機を変更し、1日で一斉に日本方式へ移行して行ったことが思い出され

る。当時のテレビニュースが那覇市内の大きな交差点で「人は左、車は右」に慣れている車がフラフラ右往左往し衝突、接触していた状況を放映していたことも思い出される。最近の社会問題で外国旅行者がレンタカーを運転し事故多発していることがテレビニュースで報じられているが納得できる。

復帰前から交換レートで話題となっていたドルと円の切り替えは復帰と同時に実地された。切り替えは政府主導で早くから計画されていて日本銀行は、海上保安庁、及び警察の警戒の下、円貨幣を銀行などの金融機関に復帰前に貨物船で運び込み準備されていた。巷では色々な噂が飛び交っていた。当時、国際条約で為替の価格の自由化の下、今の為替相場では信じられない価格であるが1ドルが295円であったが復帰後の経済への優遇策であっただろう沖縄に限って以前の固定為替の相場であった360円で交換してくれるとの噂も流れていた。私達、引き継ぎ要員も必要経費としてドルをそれぞれ保持しており興味があった。また、沖縄はドル経済の強みであったのだろう、全体的に物価が安く特に御土産品を売っている商店で貴金属が安かったと思う。保持しているドルは復帰後には使えなくなるため町中に飲みに行ったり、記念品を購入した

りドルでの買い物を楽しんでいた。皆が言っていたが、私達の経済観念では何となく1ドルが1000円の様な感覚で、ドルで買い物をしていたようで、例えば3ドル払って300円の伊勢エビ料理を注文していた訳であり、その面からも物価が安いと感じていたのかもしれない。私は安いゴールド製品、純金の指輪を買ってしまいが残りがなくなったが1ドル紙幣を1枚、コインを数個ずつ記念品として残し、今では純金の指輪とドル通貨を取り出しては、懐かしく当時を思い出している。

引き継ぎ運用に入って早々に十一管本部の体制が整い本庁及び十一管本部による機器整備計画の調査が始まった。出張来訪される方々は私達が洋食に飽きて日本食を欲しがっているのを誰からか聞かれたのだろう。お土産として一口イワシの干し物、海苔の佃煮、お茶漬け等日本食をお土産としてよく持参頂いた。数か月間のアメリカカンスタイルの肉料理中心から瞬時解放され、あの時の干しイワシの味は今でも忘れられない。

私達の引き継ぎ業務の本命である機器の整備計画は、まず無停電源装置の設置から始まった。大きなトレーラーでモーター、エンジン、発電機など一式が運び

込まれ、元娯楽室、車庫の建物を改造して設置された。続いて、ロランシステムの送信機及びタイマーはメーカーの専門技術者が来島しオーバーホールを実地し整備され、隊舎の半分を改造して移設された。私の担当課題は、予備品、修理パーツの整理、保管を命ぜられ、先にも紹介したように米国のコンピューター管理方式の一部を取り入れ、図面のパーツ番号をカードの整理方式に繋げて保管場所の番号を記し、手順を踏めば必ずその部品にたどり着けるように整理した。宮古島ロラン局の場合、転勤者が多いと考え着任者が手順を踏めば着任した日から必要な予備品を手にとできると言う考えからであった。この方式は所長から大変褒めていただいたが、何も新たな方式でなく米国のコンピューター方式の一部を活用しただけでありコソバユカッタ。整備作業で来島されるメーカーの技術者の方々は休みのときは南国宮古島を楽しんで過ごしておられた。釣り道具などを貸してやるとサンゴ礁の浜で釣りを楽しまれ、その成果を沢山頂くことも多かった。コーストガードはダイビング用具も備えていた。私は沖縄へ来る前からスキューバダイビングを趣味にしているのが着任早々から目についた。コーストガードとの共同生活

の中で自由時間にはサンゴ礁の海に泳ぎに行くこともありダイビング用具を「メイ、アイ、ユース」、「オツケー」で借用しロランステーションの前のサンゴ礁を探索した。沢山の熱帯魚は人を警戒せず指で触るまで動かなかった。多種多様の貝がいて、その収集が私の趣味となり、今になってもその趣味は続いている、今では400種以上の貝殻の標本が我が家に保管されている。振り返ってみると若い時の体験が大切であることを今になって痛感している。それは、外国人との生活体験、英会話である。ロランステーションでの会話は英単語を並べるだけの会話であり、形は整っていないかったが、言いたいことや思い、考えは通じた。そし



写真－5 広大なロラン局敷地



写真－6 局舎周辺での牛の放牧

て古希を迎える今、「そうか」とうなずけるものがある。青い目を見ても緊張感が無い事である。町中で外国人と会い、目が合うと自然に「ヤー」と挨拶が出る。続いて「ウエヤー、アーユー、フロム」と続く。若い時の異文化体験は人生を豊かにすることを今になって気付く次第である。

ロラン、デッカ等無線局は敷地が広く草刈りが大変であり宮古島ロラン局の場合も御多分にもれず敷地は広く、コーストガードは草刈り人夫さんを1人常時雇用していた。この雇用されていた方は農業を生業としていて、牛やヤギを沢山飼っており一挙兩得の考えか、隊長の許可の下、ロラン局の広い敷地に牛やヤギを放牧していた。合理的なやり方で特にヤギはきれいに草を食べて人力で草を刈るより効果があるように見えた。この方式は引き継ぎ後の私たちに、危険性と無線局の運用に支障がない範囲で所長が取り入れられ省力化と予算の節約につながったと思われる。

所長、次長が苦勞しておられた職員用の賃貸宿舎も見つかり、家族持ちの方々は児童の一学期が終了し夏休みの間に宮古島へ転居する状況となった。しかし賃貸宿舎における家族の生活は炊事、入浴は共同であり家族の方々の苦勞も並大抵ではなかったと思う。単身

者と独身者の隊舎での生活は省庁別公務員宿舎が完成するまで続いた。その省庁別公務員宿舎である灯台官舎の整備のための用地確保についても所長、次長が大変苦勞をされていた。その用地確保の条件は台風時の風が強くないこと、衛生面での問題がないこと、病院等公共施設に便利なことでありなかなか見つからなかったが、地域の方々の協力の下、用地確保、整備工作が進められ復帰引き継ぎの次の年度の初夏になって入居した覚えがある。

入居する時、当直者を除く職員全員で建設業者の車両で家財道具を運び、終了時には缶ビールで喉の渇きをいやし、宿舍入居の喜びでビールの味も格別であった。当然、運転者はジュースであった。灯台官舎では転居する時、家財道具の整理、運搬は伝統的に職員全員でする習慣があり懐かしく今でも心温まる思い出として残る。

引き継ぎ要員10名、次から次へと課題を乗り越え、あつという間に2年目の春を迎え異動の時期となり、まず3名が異動、新たに3名の職員が着任した。私も宮古島ロラン局勤務も3年目になり、宮古島平良市の町中にも慣れてきて趣味にしていた囲碁をしたくて碁会所に通うようになってきていた。

平良市のお年寄りから若い方、さまざまな方と碁石を運びながら色々な話題が尽きない。熊本県人訛りの抜けない私の言葉を聞いて、「どちらか来られましたか〜」「出身は熊本県です〜」「内地の方ですか〜」となる宮古島の方は自分たちを「みやこんちゅう」と言っていて、沖縄本島の方を「うちなんちゅう」と言っておられた。宮古島、石垣島は先島として沖縄本島とは「習慣、文化が違うんだよ」と年配の方が言っておられることもあった。また、ありえないことであるが、沖縄の祖国復帰についても『私達「みやこんちゅう」は」島が豊かになるのであれば台湾と一緒になってもよかったんですよ』とつぶやきながら碁石を運んでもおられる老人もおられた。沖縄を琉球の歴史文化から見た、沖縄の方々の本音の文化・慣習・歴史感を学ばせてもらう碁会所でもあった。宿舎の近くの海岸の沖縄的神社（内地の神社の作りとは多少異なる）の庭には「人頭税石」と言ってお小柄な人の背の高さぐらいの石が歴史の遺跡として残されていた。これは琉球王朝時代に子供が成長して、この石より背が高くなったら年貢を納める制度があり、先島である宮古島、石垣島の島民の生活は厳しかったらしい。しかし島の方々は極めて明るかった。夏になると各地域で演芸会や昔から引き

継がれた催しが行われよく見に行った。近年になって国連教育科学文化機関（ユネスコ）に登録された秋田県他7つの県の10行事「来訪神、仮面・仮装の神々」の1つに選ばれた宮古島のパースントウも各地域の祭り行事で見かけることが出来た。演芸会では沖縄のリズムが流れ即座に老若男女全員が歌いながら踊りだす賑やかな祭りであり、沖縄の方々の明るい気性にピッタリする瞬間である。島の言葉はかなり難しく歌の言葉の意味は、ほとんど理解できなかったし年配の方々の会話は99%通じなかったことが記憶に残る。言葉の違いで代表的な例を挙げるとロラン局の立地する東平安名埼がある。普通には「ヒガシヘンナサキ」だが島の方は「アガリヘンナサキ」。東は日が上るので「アガリ」と読むわけである。宮古島の西側の岬「西平安名埼」は「イリヘンナサキ」石垣島の西の「西表島」は皆さるんご存知の通り「イリオモテジマ」。

島の碁会所通いと同時にサンゴ礁の海でのダイビング、貝の採集も続いた。ダイビングの帰りに海岸を歩き墓地の前を通ることも多かった。琉球文化の1つである、一族、家族の先祖を一堂に供養される亀甲墓である。春先になるとこの亀甲墓の前に家族一堂の方が集い御馳走を前に酒宴が見られた。また、ある時、亀



写真－7 宿舍跡地（昭和47年
宿舍整備時に植えられた芝生は
元気に残っていた）



写真－8 灯浮標保管状況、コン
クリート基礎は元ロラン無線舎跡
後方：元ロランアンテナ、ディフ
アレンシャル用中波アンテナ



写真－9 ディファレンシャル
GPS局舎（平成18年当時）



写真－10 参観灯台としての平
安名埼灯台 5月に訪れた時に
は鯉幟が飾られていた

甲墓の入り口が開けられ数人の方が出入りし作業中である。しばし立ち止まり見入った。すると作業中の方が、御先祖の遺骨を洗っているのを見ないでほしいとの事。亡くなられてから数年を経て遺骨を綺麗に洗って再度ご先祖と一緒に納骨することのこと。

私は勤務3年目の夏に暑さで体の変調をきたし、内地への転勤をお願いしていた。琉球文化を沢山、沢山学ばせて頂いた、宮古島ロラン局の勤務を終えた。

そして転勤を重ね平成18年に退職し翌年の春、特別に思い出の残る沖縄宮古島を訪れた。到着し、すぐに賃貸住宅と灯台官舎を訪れた。賃貸住宅方は数年前に火災に会い、鉄筋コンクリートの骨組みだけが残されていた。灯台官舎はきれいに撤去され宿舎があった時

の名残であろう芝生が部分的に厚く成長していた。

観光巡回バスに乗って宮古島の東の岬、東平安名埼、城辺町保良の元ロラン局へ足を延ばした。元ロラン局の傍にあった湧水の豊富な保良泉は大きなレストランになり、そこで昼食をとった。私は昼食を、そこそこに済ませ休憩時間を活用し500メートル程離れた元ロラン局のあった海岸へ。元ロラン局の施設は一部撤去され、隊舎であった無線機器室は現在廃止になっている。ディファレンシャルGPS局に変身しロラン送信アンテナはディファレンシャルGPS電波を発信していた。往時、コーストガードの隊長と衛生担当の隊員がアメリカンフットボールのキャッチボールをしていた。テニスコートには宮古島周辺海域で使用されている

灯浮標が陸揚げ保管され浮標置き場になり様相は一変していた。そのディファレンシャルGPS局も近く廃止になるという。(現在は既に廃止になっている)

元ロラン局から東平安名埼灯台へ移動した。復帰当時、この東平安名埼灯台は石垣海上保安部灯台課が灯台見回り船で巡回し管理する体制であり遠距離であることから消灯事故時や台風通過後の点検等、緊急時の対応として私達ロラン航路標識事務所に復旧、点検の作業が託され何度か点検復旧に向かっていった灯台である。今では東(あがり)平安名埼灯台も「あがり」を省き平安名埼灯台になっている。東平安名埼は宮古島の観光の拠点として大きく整備され見違えるほど美しい岬となり、大勢の観光客が訪れるようになっていた。灯台は御存じのとおり参観灯台として一般に開放され、燈籠の踊り場には観光客さえ見えていた。復帰当時には宮古島周辺の池間島、伊良部島、来間島へは唯一の交通手段が船でしたが、綺麗で大きな橋がその全島に架かり、平良市内の街並みも素晴らしく発展していた。

発展した風景を見ながら沖縄復帰当時のことを思い起こした。沖縄が祖国復帰して2年目の初夏だったと思う。第二宮古島台風と命名さるほどの大型で強い台

風が来襲し非常配備態勢で所長以下数名でロラン局の当直についていた、その風はすごかった。宮古測候所の風速計が70メートルを示し振り切れていて、測候所職員の感覚では80メートル以上の風速の台風であったろうとのこと。窓の外は真っ白で視界はゼロに近い中、近くの地面が少し見えていてその地面をバレーボールの2倍ほどの石ころが風で転がっていく。当直者全員が寡黙になり茫然としていた。翌朝、東平安名埼灯台を含め被害調査に入り、当然であるが灯台までの電柱は全て倒れている。しかし電柱が折れたり電線が切れたりはいない。沖縄電力の考え方は、電柱を立てる時に地中の添え木はしないとの事。つまり、風で電柱が折れたり、電線が切れたりするよりも、頑強に電柱を建てて倒れてくれた方が被害が少なく復旧が早い。同時に費用も節約できるとの考え方があることを耳にした。台風が去ると南国の植物、福木やパイヤ等の木の葉っぱは丸坊主に近かった。しかし、10日から半月ほどで見事に力強く芽吹き電力線路の傾いた電柱も間をおかず元の姿に戻り電力線路は生き返っていたようだ。

数年後には祖国復帰50年を迎える。約50年前、沖縄の祖国復帰は国民全体の願いであり、特に沖縄の方々

は日本国憲法の軍隊を持たない、戦争をしない祖国に復帰できることに夢を持っておられたことを聞き及んだ覚えもある。東アジアの国際情勢で難しい問題がある中、我が国の訪日客誘致の政策の下、訪日外国人の増加の流れの中で沖縄にも沢山の訪日外国人が訪れているとの事。世界中から沖縄に沢山の観光客が訪れて、経済的にも発展していることを経済紙等が報じている。歴史的に薩摩藩、島津と清国、愛親覚羅と巧みな交流を重ねる中で琉球文化を育んだ沖縄は歴史の流れである明治維新の廃藩置県の政策の下、沖縄県となり古代から海洋文化の中で東南アジアから北東アジアにかけての交易、流通の要衝として経済文化を育み発展を重ねてきたことが琉球王朝の歴史文獻に紹介されている。世界がグローバル化する中、琉球沖縄が平和で力強く発展していくことを願ってやまない。

(完)

～大野灯台及び加佐岬灯台

バーチャル一般公開開始～

金沢海上保安部では、10月17日(土)に金沢海上保安部が所管している「大野灯台」及び「加佐岬灯台」のバーチャル一般公開として「灯台ONEタップビュー」に登録しました。ぜひアクセスしてみてください。

「灯台ONEタップビュー」とは、海上保安庁HPにおいて、普段見ることの出来ない灯台の内部、灯台の踊り場（頂上）からの風景などを公開し、パソコンやスマートフォン等でパノラマ画像を見ることが出来るものです。なお、第九管区海上保安本部管内では初の登録です。

URL：<https://www.kaiho.mlit.go.jp/soshiki/koutsuu/onetapview/index.html>



大野灯台



加佐岬灯台



灯台守人生よ、有難う

普通会员 堀田 克治

今、私は89才になり、89才の人生を生きています。そして、いつも思い出す言葉は、灯台守人生よ、有難う、という言葉なのです。

私は今、老人介護施設にお世話になっています。この施設は私達、灯台守人生を生きた者にとっては、縁の深い施設なのです。この老人介護施設の横を通り、海上保安学校へ行くのです。私の灯台守人生も、この海上保安学校灯台科二期生を出発点として発進しているのです。

ところで、灯台勤務、灯台生活はどんな色彩を持った世界だったのでしょうか。昔は灯台という所は島や岬とか、また山の上に建設されることが多かったのですが、灯台勤務や灯台生活には大変不便な点があったのです。

生活面では、第一番に水道がありませんでした。村や町にある水道という施設はなく、天水というか、雨水を濾過して使用していました。それはそれは水に苦

勞した灯台勤務だったのです。

また、島や山の上の勤務では、若しも病気になるたらどうしよう、医者もいないし、と心配したものでした。そして、健康については細心の注意をしようとした。そして、山の上や島には食料と言ったものはなく、妻が夫の灯台勤務のために作ってくれた食料を、私は一人淋しく、妻に感謝しながら食べたものでした。あの、灯台映画「喜びも悲しみも幾歳月」もこのような灯台守人生の世界から生まれたのです。

ここまで不便な灯台生活、灯台勤務の様子を書いて参りましたが、灯台守人生にも素晴らしい世界があるのです。灯台世界が演じる心の風景なのです。晴れた日に、山の上の灯台から静かな海を眺めていると、ああ何と静かな海の景色だろう、身も心も、うっとりしてくるのです。静かな海の風景は心の風景なのです。静かな海の風景は眺める人の心を育ててくれるのです。また、満月の夜、満月と星が演じる風景は眺める人の心を洗い、悟りの世界へ導いてくれるようである。悟りの世界へ導いてくれる満月、私の愛する心の世界である。眺めていると、何かを語ってくれる心の世界である。

ところで、灯台守人生30年の間で、どんな世界が一

番に印象深く心に残っているかと問われたら、私はためらうことなく、灯台勤務30年を務め上げた時、天皇陛下から皇居に招かれ、灯台勤務御苦勞様であったとねぎらいのお言葉を拝した世界です。と申し上げたいのです。臣下で皇居で天皇陛下からお言葉を拝するなんて、最高の思い出なのです。灯台守人生の最高の世界なのです。その皇居の席で、私はもう一つの光榮ある世界を賜うことが出来たのです。それは、天皇皇后両陛下に、御無礼とは思いましたが、私のつたない歌を献上することが出来たのでした。その歌は

大君の 恩愛深く 感涙す

永遠に忘れじ 今日の日を

皇居で天皇皇后両陛下に歌を献上することが出来たこの世界、まるで夢の世界でございました。感激の涙にくれる我が心と言った世界でした。灯台守人生、最高の世界でした。

ところで、私の妻も小学生時代の同級生で今は私と同じように、私とは別の老人介護施設にお世話になり、灯台守夫婦の90年の世界を生きています。灯台守夫婦90年の世界、これも灯台世界や燈光会の皆様方が、育て上げてくださいました人生の世界なのでございます。

夫婦揃って灯台守人生の世界を生きているなんて幸せな灯台守人生なのです。

私と一緒にあって皇居に参内した友なども、灯台守30年の勤務は、この世の人生の最高の世界であったと感謝しているでしょう。今、私も、私を90年人生の世界まで育て上げてくれた灯台守人生をこよなくあいしているのです。

そして、大変遅くなりましたが、燈光会の皆様、灯台守人生の私たちを90年人生の旅路まで導いて頂きました。若しも、燈光会の皆様方の御世話にならなかつたならば、人生90年の晴の旅路までたどり着かなかつたで御座いましょう。誠にありがとうございます。今後とも、よろしくお願い申し上げます。



・・・七 管 区・・・

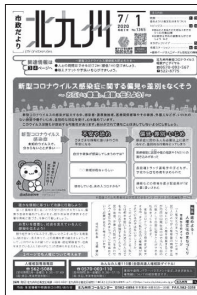
海の管制官募集！

～コロナ禍に負けるな～

海上保安学校の令和3年度入学試験の申込受付は、7月21日(火)～30日(木)です。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策の影響で、今年度は十分な募集活動が困難な状況です。特に、管制課程は定員20名に対して、2期生が9名、3期生が14名と定員を大きく割っており、今後の海上交通センターの運用管制業務継続に重大な懸念があります。

昨年度は、学校訪問や体験型職場見学会を開催して、海上交通センターや

海の管制官 海上保安学校(京都府)の「管制課程」で2年間の専門教育を受け、卒業後は運用管制官として各海上交通センターに勤務します。対高校卒業後12年未満の人から来春高校卒業見込みの人。試験は9月27日(日)。7月21～30日。詳細は関門海峡海上交通センター ☎381・6699へ。



北九州市「市政だより北九州」7月1日号

海の管制官の知名度向上に努めました。結果、第七管区受験者のうち見学会に参加した5名が管制課程に合格、うち4名が入学、1名は海上保安大学校へ入学しました。今年度は、新型コロナウイルス感染



「海の管制官」募集

☑ 高校卒業後12年未満の方または来春高校卒業見込みの方
 回 試験日 = 9月27日(日)
 期 7月21日～30日
 ※詳しくは関門海峡海上交通センター (☎093-381-6699) か海上保安学校ホームページで確認を
 国防防災危機管理課 (☎231-9333)



下関市「市報しものせき」7月号

航路哨戒船のライトメールを使用した周知、巡視艇「ともなみ」



お知らせ

2020/07/21 00:00 「海の管制官採用試験受付中」7月21日(火)～7月30日(木)
 2020/06/29 16:45 「海の管制官募集！」海上保安学校受験案内(4月入校) ☑
 2020/06/18 16:20 海上保安官募集！ ☑

ハローワーク小倉門司出張所 関門海峡海上交通センターインターネット・ホームページ

症の感染リスクを考慮した募集活動を行っています。

▽担当の高等学校9校へ受験案内資料を郵送しました。

▽ハローワーク小倉門司出張所でポスターの掲示とパンフレットの配布を行っています。

▽北九州市門司区官公署等連絡会議の御縁から官公署長等の御厚意で門司区役所、門司駅と北九州商工会議所（門司）に学生募集のポスターを掲示しています。

▽昨年度の見学会に参加した高校生10名の内5名が保護者同伴であったことから、進路決定に保護者の影響が大きいく感じました。このことから、北九州市と下関市の市報を利用して広く両市民に周知し海の管制官の知名度を向上させるとともに、保護者の心も掴むことにしました。

▽関門海峡に面した門司港レトロ地区や下関市の唐戸地区は、海岸付近での市民や観光客の活動が活発なこと

から、航路哨戒船のライトメールを使用して、市民や観光客にむけて周知しています。

▽関門海上交通センターのインターネット・ホームページを利用して広く周知しています。

関門海峡海上交通センターは、新型コロナウイルス感染症防止に配慮しつつ、年間を通して計画的・定期的に広く募集活動を行います。また、地域に寄り添い海上交通センターや海上保安庁の理解促進に努めます。

（関門海峡海上交通センター）

大型台風に向けて安全とBCP

これまでに無い大型で非常に強い台風10号が、9月6日の夜から7日に、管内を通過しました。台風の接近前に、職員と家族の安全、庁舎等の被害軽減、業務継続の観点から次の体制を執りました。

○職員と家族の安全

▽常時連絡体制を確保する。

▽職員と家族の安全を最優先とする。

▽出勤は、危険が想定される場合は行わない。

▽出勤途中で危険を感じたら直ちに安全な場所に避難する。

○庁舎等の被害軽減

▽暴風で飛散の恐れがある物は事前に屋内に移動させる。

▽ガラス窓の破損で風雨が屋内に侵入した際に被害が発生する恐れのある器物類は可能な限り事前に安全な位置に移動させる。

▽被災時に備えて、防水シートやロープ類を準備しておく。

○BCP

▽AISによる監視と国際VHFによる連絡体制の確保を優先する。

長距離通勤の職員は、前日から庁舎や近傍に宿泊してくれました。屋外の自転車等の飛散の恐れがある物は全て



車の被災



散乱したスレート破片

で、庁舎等にも被害はありませんでした。

一点だけ、隣接するスクラップ工場の屋根と壁が壊れて大小多数のスレート破片が敷地内に散乱、職員の車3台が被災しました。

した。修理については調整中です。

(関門海峡海上交通センター)

管制課程学生が、初めて

関門海峡で実習を行いました

～海の管制官を目指して～

10月7日、8日、海上保安学校管制課程の2年生9名が、初めて関門海峡海上交通センターで運用管制業務の実習を行いました。

潮の流れが速く多くの船が行き交う

関門海峡では、海上交通センターが設置され、運用管制官などが24時間レーダーなどで船の動静を監視して、個別の船に安全航行に必要な他船の動向などの情報を提供するなどして、事故を防いでいます。

海上保安学校管制課程は、高い技能を持った運用管制官を専門に育成するために平成30年4月に新設されました。今回実習したのは、平成31年4月に入校した、第2期生で、来年の3月には、全国の7箇所の海上交通センターの何処かへ赴任する予定です。

今回は、特に、運用管制官の技能やチームワークの向上のためのV-T-R M訓練 (Vessel traffic service team rescues management training) にも挑戦しました。学生が運用管制官役 (プレーヤー)、現役の運用管制官が船役 (コントローラー) で訓練卓で無線交信をして「情報」や「勧告」を行い、終了後は、デブリーフィングも行いました。

NHKと西日本新聞の取材も行わ

屋内に移動させました。海上交通センターのネットワーク回線が使用不能となった場合を想定して国際VHFのバックアップを準備、万全の態勢で備えました。幸いにも、台風の勢力は予想より早く弱まりました。又、事前の報道等による警戒情報で、多くの船舶が台風を避けて瀬戸内海など遠く東の海域に避難しました。管内の避泊船は、AIS搭載船で約70隻と、これまでの台風時の1/3以下でした。船舶交通の安全は確保され、職員と家族も無事



実機操作説明を受けている様子



かほく市民大学講座にて講演する
交通担当次長

れ、実習生らは、緊張した面持ちで懸命に実習に取り組みました。

(関門海峡海上交通センター)

九 管 区

かほく市民大学講座にて 灯台の歴史について講演

金沢海上保安部は、10月2日(金)1930~2100、かほく市教育委員会生涯学習課が主催する、かほく市民

大学講座において「そうだったのか！日本の洋式灯台〜白尾灯台の歴史〜」という演題にて、灯台の歴史について講演を行いました。

これは、初代白尾灯台の写真が旧七塚町誌から発見され、交通担当次長が、CAD図面及びペーパークラフトにて再現のうえ、8月5日に「うみっこらんど七塚」(かほく市教育員会運営)に贈呈し、白尾灯台の歴史を掘り起こし、テレビ2社、新聞2社に大きく取り上げられたことから、かほく市教育

員会教育長から、同講座での講演依頼があったものです。

受講者30名(予約制定員)は、白尾灯台の歴史や灯台152年の歴史を興味深く聴講され、講演終了後には、多くの質問もあり、特に幕末からの話は、大変面白く勉強になったとの嬉しい感想をいただきました。

当部は、普段から地域の方との交流を大切に行っていることもあり、当日は、その関係者の方からお祝いの花が届けられるサプライズがありました。

この市民大学講座は、今年は全5回の歴史学びコースが予定されており、その第1回目を当部が担当させていただいたものです。

夕食後の眠い時間帯にも関わらず、メモ書きを一生懸命取られるなど熱心に聞き入っておられました。

(金沢海上保安部交通課)

第4弾

のぼる灯台(16基) スタンプラリー達成者



本年は全灯台参観中止期間がございましたが、各灯台の再開後から訪れて頂きありがとうございました。達成者の皆様、おめでとうございます！

同着
第19号

大塚 唯香 様(33歳)千葉県千葉市在住

☆ スタンプラリー開始年月日 平成30年10月28日 犬吠埼灯台

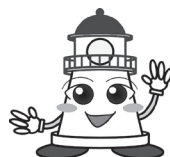
☆ スタンプラリー達成年月日 令和2年6月28日 都井岬灯台

☆ スタンプラリーを始めたきっかけ

犬吠埼灯台でスタンプラリーの本(スタンプ帳)を見つけた為

☆ 16か所達成した感想

尻屋崎2回も行ったけど閉ってた。きつかった…。



同着
第19号

清水 滋 様(72歳)神奈川県川崎市在住

☆ スタンプラリー開始年月日
平成30年11月18日 角島灯台

☆ スタンプラリー達成年月日
令和2年6月28日 入道埼灯台

☆ スタンプラリーを始めたきっかけ

旅行中、タマタマ寄った。

☆ 16か所達成した感想

沖縄が大変でしたが楽しかったです。



入道埼灯台にて

第21号

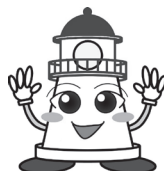
佐藤 佳征 様(49歳)神奈川県横浜市在住

☆ スタンブラリー開始年月日 令和2年1月19日 潮岬灯台

☆ スタンブラリー達成年月日 令和2年7月26日 尻屋埼灯台

☆ スタンブラリーを始めたきっかけ
スタンプを集めたかった。

☆ 16か所達成した感想
もっとのぼれる灯台がふえてほしい。



第22号

濱田 修輔 様(47歳)神奈川県横浜市在住

☆ スタンブラリー開始年月日 令和2年2月1日 野島埼灯台

☆ スタンブラリー達成年月日 令和2年7月26日 尻屋埼灯台

☆ スタンブラリーを始めたきっかけ
スタンプブック(スタンプ帳)の存在を知ったこと。

☆ 16か所達成した感想
灯台毎の特徴の違いが分かり興味深かった。



第23号

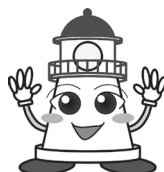
名もなき旅人 様(39歳)

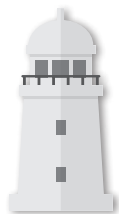
☆ スタンブラリー開始年月日 平成30年12月31日 都井岬灯台

☆ スタンブラリー達成年月日 令和2年8月15日 尻屋埼灯台

☆ スタンブラリーを始めたきっかけ
都井岬灯台で見かけて。

☆ 16か所達成した感想
灯台50選とちがい民間人でも到達可能なのが良い。





燈台模型展 ～博物館明治村にて～

一般会員 久 保 邦 雄

展示の経緯

会社を定年退職後、2006年からバイクで全国の灯台巡りを始めました。73歳になりバイクを重く感じるようになり木工で燈台を作ることに挑戦しました。地元の第四管区海上保安本部交通部様に制作した「菅島灯台」を寄贈したところ、海上保安庁創設70周年、灯台150周年の企画で博物館明治村で灯台模型を展示して頂き、有難いことに交通部様のお薦めで同施設に収蔵して頂くことが決まりました。時を経て今回の「品川燈台創建150周年記念 灯台模型展」に、保存灯台A～Cランク全48基の木工灯台模型を第一～第十管区別に一堂に展示されています。資料のご協力を頂きました第一～第十管区海上保安本部交通部企画課様のおかげで制作できました、ありがとうございました。

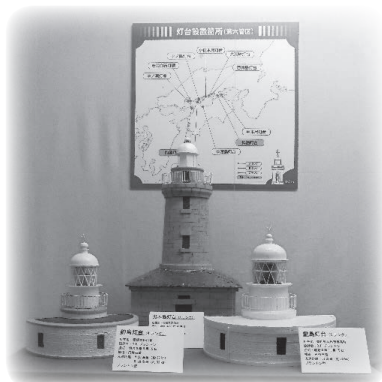
開催期間：2020年10月3日～11月23日

場 所：博物館明治村

三重県庁舎1F特別展示室

住 所：愛知県犬山市内山一番地

電 話：0568-67-0314



久保 邦雄

〒476-0003 愛知県東海市荒尾町奥曾山1-61

mail : kubok@ma.medias.ne.jp

灯台のマイホームページ : <http://kuboktoday.web.fc2.com/>



古い江崎灯台の写真を

探しています！

神戸海上保安部交通課

江崎灯台は、英国人技師ブランドンによって設計・建設され、明治4年（1871年）我が国で8番目に建設された石造りの洋式灯台で、建設当時の姿をそのまま残す現役灯台としては2番目に古く、歴史的・文化的にも価値ある建造物です。その江崎灯台は来年初点灯から150年の節目を迎えます。神戸海上保安部では江崎灯台150周年プレイベントとして、また、江崎灯台の長い歴史を少しでも残したいとの考えから江崎灯台が写っている写真を次のとおり募集します。貴重な古い江崎灯台の写真を提供して頂ける方からの連絡をお待ちしております。

記

1 写された写真の条件

明治から昭和時代に撮影された写真（大きさ、白黒・カラーを問わず）

2 提供条件

- ・提供された写真を写真パネルとして江崎灯台の一般公開ほか海上保安庁が開催するイベント等において使用・展示することを了解いただける写真
- ・提供された写真を展示に際しては、提供者名（会社名）を明記します。
- ・提供された写真への謝礼はありません。（ボランティアでお願いします。）

3 募集期間

令和2年10月26日（月）から当分の間（令和3年4月頃まで）

4 連絡方法等

神戸海上保安部交通課

電話078-3327-8835

（平日9時～17時）

へ連絡をお願いします。

写真の提供方法・提供条件等

を相談させていただきます。



現在の江崎灯台

日本の灯台 2021

～のぼれる灯台 16～

販売価格 **600円 (税込)** (送料・振込手数料 実費)

★会員の方には1部贈呈致します

角島灯台
(山口県下関市)



入道崎灯台 (秋田県鹿角市)



犬吠崎灯台 (千葉県銚子市)



御前崎灯台 (静岡県御前崎市)



潮岬灯台 (和歌山県串本町)
初島灯台 (静岡県熱海市)



尻屋崎灯台 (青森県東通村)



塩屋崎灯台 (福島県いわき市)



都井岬灯台 (宮崎県串間市)
出雲日御碕灯台 (島根県出雲市)



残波岬灯台 (沖縄県読谷村)



平安名崎灯台 (沖縄県宮古島市)



大王崎灯台 (三重県志摩市)
観音崎灯台 (神奈川県横須賀市)



安乗崎灯台 (三重県志摩市)



野島崎灯台 (千葉県館山市)

申込先

公益社団法人 燈 光 会

〒105-0003 東京都港区西新橋1丁目14番9号 西新橋ビル3F
TEL (03) 3501-1054 FAX (03) 3507-0727
Eメール: info@tokokai.org

昭和三十一年十一月二十五日発行(隔月一回五日発行) 三種郵便物認可

「燈光」

十一月号 第六十五卷 第六号